



令和2年度

障害者による 文化芸術活動推進事業 事例集



はじめに

文化庁では、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」に基づく基本計画に沿って、鑑賞の機会の拡大や創造の機会の拡大、作品等の発表の機会の確保など、障害者等による文化芸術活動の推進に関する施策の総合的かつ計画的な推進に取り組んでいます。

令和元年度からは、障害者等による文化芸術の鑑賞や創造の機会の拡充、作品等を発表する機会の創出などを図る取組、人材育成に資する取組等、共生社会を推進するための様々な取組を、各種団体に委託実施しているところであり、この度、令和2年度の各団体の取組を関係者間で共有するため、事例集としてとりまとめました。

令和2年度は新型コロナ・ウイルス感染症の影響により、計画の変更や縮小を余儀なくされた事業も多くありましたが、委託団体の臨機応変な対応や創意工夫により、オンラインによる新たな層の開拓など当初は想定していなかった成果に繋がった事業もあるなど、モデルケースとしても参考にさせていただける内容となっています。

この事例集を広く活用いただき、より一層、障害者等による文化芸術活動の推進が図られることを願うものです。

文化庁地域文化創生本部

| | | |
|-----------|---|------|
| 01 | 共に歩き出そう「ふれあいまつり」感謝をありがとう 特定非営利活動法人 アートステージ空知 | ……04 |
| 02 | 「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2020 一般社団法人 MMIX Lab (媒体融合 Lab) | ……06 |
| 03 | 障害のある人たちの舞台芸術支援プロジェクト (TAMAP ダンス公演プロジェクト 2020) 社会福祉法人 みぬま福祉会 | ……08 |
| 04 | 「声の力」プロジェクト 株式会社 朝日新聞社 | ……10 |
| 05 | 障害者文化芸術活動推進に向けた劇場・音楽堂等取組状況調査 公益社団法人 全国公立文化施設協会 | ……12 |
| 06 | 多様性を育むダンス&美術プロジェクト——障害のあるアーティストの 発掘&育成、ファシリテーター育成及び発表の場づくり クリエイティブ・アート実行委員会 | ……14 |
| 07 | バレエによるインクルージョン促進事業 公益財団法人 スターダンサーズ・バレエ団 | ……16 |
| 08 | 社会と知的障がい者施設を演劇でつなぎ地域のプラットフォームをつくる事業 一般社団法人 日本演出者協会 | ……18 |
| 09 | やってみようプロジェクト 公益社団法人 日本劇団協議会 | ……20 |
| 10 | プロの音楽家を介在したインクルーシブ体験の創造 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団 | ……22 |
| 11 | 国際芸術祭実施に向けてのろう者の芸術活動推進事業 2020 社会福祉法人 トット基金 日本ろう者劇団 | ……24 |
| 12 | チェルフィッチュ「消しゴム山」東京公演 鑑賞サポート 一般社団法人 チェルフィッチュ | ……26 |
| 13 | 新国立劇場主催演劇公演における観劇サポート 公益財団法人 新国立劇場運営財団 | ……28 |
| 14 | 社会的養護のもとにある障害児等による地域間交流から 生まれるパフォーマンス作品の創作と発表 特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち | ……30 |
| 15 | ホスピタルシアタープロジェクト 2020— すべての子どもたちと家族のための多感覚演劇の上演 特定非営利活動法人 シアタープランニングネットワーク | ……32 |
| 16 | 横浜芸術文化・障害福祉プラットフォーム形成事業 特定非営利活動法人 ST スポット横浜 | ……34 |
| 17 | 和太鼓で健康増進・社会包摂を実現する「エクサドン (EXADON)」プロジェクト 公益財団法人 鼓童文化財団 | ……36 |
| 18 | 熊川宿若狭美術館を拠点とする芸術文化推進事業 特定非営利活動法人 若狭美&B ネット | ……38 |
| 19 | CONFUSION INCLUSION ～芸術を冒険する～ 特定非営利活動法人 ポバイ | ……40 |

| | | |
|----|---|----|
| 20 | 障害のある児童や成人の身体的芸術活動（ブレイクダンス）の創造と発表の機会を確保・充実させる取り組み 日本アダプテッドブレイキン協会 | 42 |
| 21 | 舞台芸術鑑賞サービス ショーケース&フォーラム 一般社団法人 日本障害者舞台芸術協働機構 | 44 |
| 22 | 日本センチュリー交響楽団 特別支援学校コンサート 公益財団法人 日本センチュリー交響楽団 | 46 |
| 23 | 障害者の舞台芸術支援と支援人材の育成に関するプラットフォーム Open Arts Network Project (オープンアーツネットワークプロジェクト) 社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会 | 48 |
| 24 | 日本・アジアの障害のある人の舞台芸術作品と先進的な鑑賞支援に関する海外発信 社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会 | 50 |
| 25 | こんにちは、共生社会（ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ） 特定非営利活動法人 ダンスボックス | 52 |
| 26 | NEW TRADITIONAL：障害のある人の表現と伝統工芸の相互発展 一般財団法人 たんぼぼの家 | 54 |
| 27 | 障害のある人の表現と知的財産権に関する知財学習プログラムの開発 一般財団法人 たんぼぼの家 | 56 |
| 28 | 共生社会東アジアモデル構築事業「演劇で編む『共に生きる』」 特定非営利活動法人 鳥の劇場 | 58 |
| 29 | 島根県民会館インクルーシブシアター・プロジェクト 公益財団法人 しまね文化振興財団 | 60 |
| 30 | ～つくる・つながる・つたえる・つづく～ 「おきらく劇場ピロシマ」による文化芸術活動促進事業 一般社団法人 舞台芸術制作室無色透明 | 62 |
| 31 | 障がい者支援施設へのアーティスト派遣と障がいのある人との表現活動促進事業 NPO 法人シアターネットワークえひめ | 64 |
| 32 | パーキンソン病患者によるダンス活動の普及事業～継続とエビデンス編～ 一般社団法人 パラカダンス | 66 |
| 33 | Reverse Outreaches ～文化施設職員向けの社会包摂普及事業～ 公益財団法人 宮崎県芸術文化協会 | 68 |
| 34 | おきなわインクルーシブアートプロジェクト 一般社団法人 エーシーオー沖縄 | 70 |
| 35 | 音楽体験を通じた不登校児童生徒の社会的接点を作る 音楽プログラムの開発と実践、及びその検証 一般社団法人 楽友協会おきなわ | 72 |
| 36 | ゆいまーるミュージックプロジェクト 一般社団法人 琉球フィルハーモニック | 74 |
| 37 | 第14回・第15回愛音楽（アネラ）音楽祭 特定非営利活動法人 サポートセンターケントミ | 76 |

事業名

共に歩き出そう「ふれあいまつり」 感謝をありがとう

団体名

特定非営利活動法人 アートステージ空知
所在地：北海道滝川市

事業概要

障害のある人とない人が太鼓を媒体に、手を取り合って共に舞台を創ることを目的にワークショップを開催し、交流の場を創出する。雨竜高等養護学校、ほほえみ工房、ディスプレイスふれあいの家などの障害者団体と支援サポートスタッフがワークショップを重ね、滝川市でその成果を発表した。

太鼓を媒体にして障害のある人とない人が手を取り合う 困難を共に乗り越えて新たなコミュニティを形成

実施内容

総勢 120 人を超す参加者が太鼓を生演奏。演奏を通じて家族や支援スタッフに感謝を伝える

和太鼓奏者のしんたさんの指導を受けて太鼓の練習をし、その成果を「ふれあいまつり」で披露しました。

●共に歩き出そう『ふれあいまつり』 感謝をありがとう

開催日（期間）：2020年11月1日

場所：たきかわ文化センター

対象：出演者（障害者施設利用者）、観客（近郊中心の市民・出演者の家族等）

参加人数：観客 328 名、出演者 71 名、スタッフ（実行委員会およびサポーター） 53 名 計 452 名

参加費の有無：有り、入場料 500 円

公演内容：指導者・和太鼓奏者のしんたさんから提供された新曲も含め、演目ごとに交代で発表をしました

大地（だいち）：太鼓集団夢ファミリー
「ふれ愛」

祭り（まつり）：太鼓集団夢ファミリー
「ふれ愛」

出陣（しゅつじん）：ほほえみ工房
「ほほえみ太鼓」

ジャングル：しんた・小室孝太

暑（しょ）寒（かん）うちスペシャル：

雨竜高等養護学校「太鼓クラブ」

朝焼け（あさやけ）：雨竜高等養護学校
「太鼓クラブ」

井上（いのうえ）つよしコーナー：

井上つよし

辰（たつ）：しんた・小室孝太

青空（あおぞら）：太鼓集団夢ファミリー
「ふれ愛」

疾風（しっふう）：太鼓集団夢ファミリー
「ふれ愛」



「ふれあいまつり」公演パンフレット

事業の効果

障害者の本当の姿を多くの人に見てもらおうことで理解を深めたい

もともとは2016年に障害のある人とない人の共生共創による舞台づくりを目的に、NPO法人アートステージ空知、深川ディスプレイスふれあいの家、拓殖大学北海道短期大学庄内ゼミの3団体で結成した「夢プロジェクト実行委員会」が始まりでした。同実行委員会の活動によって3年間にわたり演劇公演を実施してきました。その活動を通じて、私たちは障害者の思いに寄り添うこと、また障害者の意思と気持ちを一番に大切にすることがいかに重要か身を持って実感したのです。例えばこのようなことがあ

りました。2回目の公演の時に、出演した障害者の方が「私は障害者という言葉が大嫌いです。障害者という言葉無くして欲しい」と切実に訴えたのです。このことは表に現れない日々の生活の中で、障害のある方たちが様々な出来事を経験していることを示唆するものでした。私たちはこの言葉を重く受け止めて、彼らのこうした困難を取り除くためには取り組みを継続すること、それによって彼らの本当の姿を多くの人に見てもらおうことが必要だと気づいたのです。

点から線へ、線から輪へと取り組みが発展。総勢120人を超える参加者が集い太鼓を演奏

2019年からは参加者の要望を受けて、演劇からパチに持ち替え、和太鼓奏者のしんたさんを指導者に迎え、ワークショップを開きながら初めての太鼓公演を開催しました。太鼓集団夢ファミリー「ふれ愛」のメンバーは総勢39人です。さらに、公演のチラシを見た滝川市の「ほほえみ工房」の施設長から「ほほえみ工房」の障害者の方にも太鼓の指導をして欲しいとの申し入れをいただきました。このようにひとつ

の取り組みが点から線へ、線から輪へと大きな広がりを見せたのです。最終的には71人の障害者と53人の支援スタッフが集い「ともに歩き出そう」をテーマにした太鼓公演「ふれあいまつり」を11月1日に開催することができました。これまでお世話になり、サポートしてくれた皆様、支えてくれた家族に改めて感謝と拍手を送りたいです。

「夢プロジェクト」は「希望プロジェクト」へ発展

「夢プロジェクト」として発足したこの取り組みは、一般公募の市民も含めて新たに「希望プロジェクト」と名称を変え、新たな一步を踏み出しました。障害のある人とない人も共に話し合い、協力しながら

ら一つずつ困難を克服して前に進み、大きな一つのファミリーを目指し、新たなコミュニティづくりを目指して前進していくつもりです。



ほほえみ太鼓ワークショップ開始！パチはどう持つ？



雨屯高等養護学校体育館 大太鼓もスタンバイ!!



太鼓集団夢ファミリー「ふれ愛」青空の練習風景

新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症の影響によって十分な交流が図れない、ワークショップの参加者が少ない、観客へのアンケートが実施できないなど様々な影響がありました。対策としては、希望プロジェクト実行委員会の中にコロナ対策委員会を作りました。委員会では当日の受付体制を工夫したり、関連事業所に感染対策の周知を図る一方で、観客に対しては貼り紙で対応を知らせるなど、安心して来場してもらえるように配慮しました。

事業名

「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2020

団体名

一般社団法人 MMIX Lab (媒体融合 Lab)

所在地：仙台市青葉区 URL：http://mmix.org

事業概要

同法人は、アートによる社会包摂（ソーシャルインクルージョン）の概念の普及と障害者の社会参加の促進を目指して活動を展開している。今回の事業では、クリエイターと障害者が創造的に活動するための場を創り出すことを支援した。さらに、障害者の作品などの展示ギャラリーや、コロナ禍でも表現活動ができるスタジオを備えた交流拠点を整えた。その上で、専門家の支援の下でデザインや広報PR、グッズ開発などを行った。これまでのアートによるインクルーシブ活動を編集してまとめ、情報の受発信を行い、アートによるインクルーシブ社会の実現に向けた企画を実施した。

クリエイターと障害者をつなぎ、アートによるインクルーシブ社会の実現を目指す

実施内容

就労継続 B 型の福祉サービス事業所に集い、アート活動を展開

●「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2020

『アート・インクルージョン』とは生き方であり、ひとつの思想です。私たちは芸術文化活動を通して、障害の有無や性別、年齢、国籍を超えて人々が積極的に社会にかかわり、あらゆる人を優しく包み込む社会の実現を目指して「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」を開催しています。また、「アート・インクルージョン (Ai) ファクトリー」は、美術、音楽、身体表現などを仕事とする就労継続 B 型の福祉サービス事業所です。ここに集う表現者たちと、アーティストやデザイナーなどのクリエイターが出会うことにより、作品制作やデザイン開発・普及を行い、アートによる社会包摂(インクルーシブ社会)の可能性を探ってきました。今回の取り組みは、その成果を伝える展示企画です。

開催日：2020年8月24日（～2020年8月30日）

場所：スペース・ゼロ（東京都渋谷区）

●アート・インクルージョン展

「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2020

アート・インクルージョン 10年に合わせたプロジェクトとして「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2020と題する展覧会を開催しました。展覧会ではコロナ禍でもできる表現として、ZOOM

でのトークを実施。また聴覚障害者対応として、手話通訳者を入れたLIVE紹介なども行いました。

開催日：2021年3月17日～21日

場所：せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア
(仙台市青葉区春日町2-1)



事業の効果

グッズの開発や販売で、障害者の工賃向上を図る

イラストやグッズのデザイン、開発といったアート活動を通じて、障害者の賃金向上につなげる道筋を作りました。これまでも、アート活動を通しての障害者支援の先行事例はありました。しかし、障害のあるクリエイターを派遣してB型福祉事業所の障害者とワークショップを行ったり、協働で作品やグッズ開発を行っている支援活動はあまり聞きません。魅力的な作品を創っている障害のある表現者は多いにもかかわらず、発表の場は少なく工賃も低い状況です。こうした状況を改善するために、本事業では

アーティストやデザイナーなどのクリエイターを月に2回派遣しました。またアート・インクルージョンファクトリーに通う障害者も、テレワークができる環境を整備し、イラストやグッズ開発などを行いました。情報の受発信は毎月SNSなどで実施。開発した障害者のアートグッズ、ノート、ペン、Tシャツ、小作品のアクセサリを始めとするマルチプルグッズは、展示ワークショップなどの発表の場で紹介や販売し、障害者の工賃向上につなげることができました。

アーティストと障害者の拠点を整備

宮城県石巻市水押の「コトのアート研究所」内や仙台のB型福祉事業所「アート・インクルージョンファクトリー」内の一部スペースを整備しました。これによって、作品制作のワークショップや展示のできるギャラリースペース、さらにはコロナ禍でも活動できるオンラインLIVE用のスタジオが整備されました。仙台のJR長町駅前広場や仙台市太白区文化

センター、東京（SPACE ZERO）で展覧会を実施したり、石巻、せんだいメディアテークでの展示ワークショップやトーク事業によって、多くの人に活動を周知することができました。またコロナ禍でのオンラインLIVE発信（Zoom）によって、多くの人に活動を発信することができ、高い社会的波及効果を得ることができました。



新型コロナウイルス感染症の影響

3密を避け、人数制限や検温、アルコール消毒、連絡先記入など新型コロナ対策を行った上で展示やワークショップを実施。さらに、Web会議システム（Zoom）やYouTubeなどのICTも駆使して活動を継続しました。対面とは異なる取り組みとなりましたが「表現活動を止めない！」をモットーに、新たな展開や可能性を感じる結果となりました。今回の経験は、コロナ禍でもできる表現活動の前例となったと感じています。また、新型コロナウイルス感染拡大にともない、事業所でもテレワークを導入しました。事業所では人数制限での勤務となる中、ワークショップなども対面での取り組みからWeb会議システム（Zoom）を使用した展開となりました。

事業名

障害のある人たちの舞台芸術支援プロジェクト (TAMAP ダンス公演プロジェクト 2020)

団体名

社会福祉法人 みぬま福祉会

所在地：埼玉県川口市 URL：http://minuma-hukushi.com/

事業概要

障害の有無に関わらずに活動するダンスグループ「ベストプレイス」主宰の竹中幸子氏を講師に迎え、障害者とその支援者を対象としたダンスワークショップ。同じ時間と空間を共有する中で育まれる関係性を大切に、今年度は劇場公演を追加。一人ひとりが主体的に関わるように参加者と話し合いを行い、小道具や衣装制作は参加者に依頼した。支援者も、ダンスのサポートを通じて、その人の表現の引き出し方を学ぶ。

障害のある人たちの身体表現の可能性を探り、 取り巻く人たちの支援力も育むワークショップ事業

実施内容

8回のワークショップに合計 200 人以上が参加。そのうち 19 人は、劇場公演に向けて練習も。
自主性を引き出し公演制作にも携わる

年齢、性別、障害の有無やその重さに関わらずに活動しているダンスグループ「ベストプレイス」主宰の竹中幸子氏を講師に迎え、埼玉県内の障害者とその支援者を対象にダンスワークショップを開催。参加者は埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP 土〇（通称タマップ）の利用者と支援員から募り、全 8 回のワークショップに合計 214 名が参加しました。

8 回中 4 回のワークショップは、参加者の中から選ばれた 19 人の固定メンバーの劇場公演に向けての練習を兼ねています。

講師と相談のうえ、毎回の練習のあとに参加者と話し合いの場を設けて、積極的にダンス公演のプログラム作りにも加わってもらいました。その結果、メンバーの一人が衣装担当に立候補し、ほかの出演者それぞれの人柄に合わせて舞台衣装制作を行いました。また、使いたい小道具を参加者が制作してきて

ダンスプログラムの中に組み込んだり、ダンス公演のタイトルのアイデアを出したりしました。

●障害のある人たちの舞台芸術支援プロジェクト (TAMAP ダンスプロジェクト 2020)

開催期間：2020 年 8 月 8 日～ 2020 年 12 月

会場：埼玉県障害者交流センター（WS）、

彩の国さいたま芸術劇場小ホール（公演）

対象：埼玉県内在住の障害のある人とその支援者

参加人数：合計 214 名

参加費の有無：無

講師：竹中幸子（ベストプレイス）

内容：ワークショップを 8 回開催。うち 4 回は、選ばれたメンバーが劇場公演へ向けての練習も行う。毎回話し合いを行い、衣装作りなどの自主的な活動へと結び付けた。



撮影：武藤奈緒美



事業の効果

コロナ禍の中でこそ、同じ時間と場所の共有を大切に 達成感や自信が、参加者からほかの参加者へと波及した

本ワークショップには、決められた振り付けや厳密なルールはなく、自分のペースで参加できるような環境で行いました。緊張していた参加者も、徐々に、上手に踊るのではなく自分が美しいと思う動きをすればいいことを理解するとともに、それを共有する楽しさを講師やほかの参加者と体得していく姿がありました。

劇場公演に向け、練習だけでなく、講師や支援員と意見を出し合う場も設け、衣装の制作や、舞台小道具として作品を提供してもらうなど、公演全体とともに進めました。積極的に参加する姿には達成感や

自信が見られ、その様子がさらにほかの参加者へと波及し、ダンスを通じて心境の変化や新たな関係性が生まれていきました。

コロナ禍において、リモートが増えましたが、障害の重い人たちにとって、画面越しのコミュニケーションは理解が難しいという問題があります。そこで、本ワークショップはリモートにはせず、ソーシャルディスタンスの確保など制約のある中で進めました。このような状況だからこそ、同じ時間や場所を共有することの重みや大切さを、参加者の表情や情緒の変化から実感できます。

見る人の想像力を掻き立てる独創的な動き、表現者としての気概 身体表現の可能性を探り、外部への発信を目指す

これまでワークショップを4年継続し、今年度初めて劇場での公演を決めました。講師が、個々の参加者の特性を理解し、魅力を引き出す公演プログラムを用意しました。参加者の動きはどれも独創的で、見る人の想像力を掻き立てます。「表現したい、見てほしい、社会とつながりたい」という切なる願いが、手足の動きに滲み出ていました。

参加者は劇場公演に対し、仕事としての緊張感を

持っていました。レクリエーションとして楽しむだけでなく、自分たちの表現を社会で認めてもらうという、表現者としての気概が見られました。

障害のある人たちは、常に社会とつながることを求めています。施設内や内輪だけで満足するのではなく、どのような形であっても社会に発信する機会、また、未だ表現できずにいる多くの人に発信の機会を提供することが必要だと考えます。



新型コロナウイルス感染症の影響

当初、埼玉県内全域からワークショップ参加者、舞台出演者を募る予定でしたが、募集先が福祉施設であり、運営も福祉施設であるため、クラスター発生の懸念があり手が挙げられず、声をかけることも困難でした。ワークショップでは、基本的な感染症対策を万全に行い、参加者は行動履歴の明らかな人のみに絞り、連絡先を確認しました。

また、劇場公演の予定が1月でしたが、緊急事態宣言の再発出や感染者数の増加など、参加者の健康面への不安もありキャンセルせざるを得ませんでした。代わりにオンラインで動画を配信することにしました。

「声の力」プロジェクト

株式会社朝日新聞社

所在地：東京都中央区 URL：<https://www.asahi.com/corporate/>

視覚障害のある高校生たちが、声による伝え方の多様性を学ぶことで、自分自身の可能性を再発見することを目指して活動している。声の表現のプロである人気声優を、講師として全国の盲学校に派遣し、特別出張授業を開催。声の演技の基礎体験を通じて、気持ちを声にのせることの大切さやその方法を学んでもらう。視覚障害のある高校生たちが声による表現方法を学ぶことで、自身の可能性を広げることを目指す。また、これらの目的を達成するために特別出張事業や視覚障害児と晴眼児によるインクルーシブ合宿、多角的な情報発信などを行った。

声による伝え方の多様性を学び、自分自身の可能性を再発見する

実施内容

声のプロフェッショナルが盲学校で特別授業

●一流のプロ声優による盲学校への特別出張授業 (全国のべ5箇所)

声による伝え方の多様性を学ぶことで、視覚障害児が自分の可能性を再発見することを目指して特別授業を行いました。特別授業ではプロの声優が講師となって、オリジナルな講習が展開されました。例えば生徒たちは自己紹介などを通じて自分を表現する手法を学習。また、呼吸法や発声法、セリフ術、笑う練習、オーディションの台本を使った演技などさまざまなことを経験しました。

開催日・場所：

2020年11月26日（筑波大学附属視覚特別支援学校）、12月8日（神奈川県立平塚盲学校）、12月19日（筑波大学附属視覚特別支援学校）、2021年1月18日（群馬県立盲学校）、3月3日（香川県立盲学校）



●インクルーシブ合宿

視覚障害児と晴眼児の高校生10人による「インクルーシブ合宿」を開催しました。声優の岩田光央氏を講師に招き、課題作品である子ども向け小説『シリウスくんの不思議かいけつ日記』（こどもノベル・プロジェクト※主婦の友インフォス提供）の朗読劇に挑戦しました。4日間かけて真剣に取り組んだ結果、それぞれの個性が光る朗読劇になりました。

開催日：2021年1月9、23、30、31日

実施方法：オンライン（Zoom）

参加者：筑波大学附属視覚特別支援学校高等部1～2年生5人、筑波大学附属高等学校1～2年生5人の計10人

●情報発信

プロジェクト全体を通じた重層的な情報発信を行いました。また、プロジェクト特設ページを設置しました。特設ページ URL

<https://www.asahi.com/dialog/voice-power/>



事業の効果

“声で届ける授業”は子どもたちの一生の財産に

視覚障害のある児童が、声による多様な伝え方を学ぶことで、自分自身の中にある新たな可能性を発見するのをサポートしました。この「声の力」プロジェクトは、視覚障害のある中学生・高校生たちが、声による伝え方の多様性・相手の心に届く伝え方を学ぶことで、自分自身の可能性を再発見することを目指し、2019年度に始動いたしました。声優プロダクションの最大手である青二プロダクションおよび声優養成所の最難関である青二塾の全面協力と、声

優専門誌「声優グランプリ」編集部のバックアップのもと、第一線で活躍する声優5人が講師として参加。ドラえもんやピッコロなど、誰もが知るアニメキャラクターが授業をしてくれるということは、視覚障害のある子どもたちにとって、想像以上にインパクトのある経験となりました。著名な声優が自分の気持ちを声で相手に届ける方法を教える授業は、子どもたちの一生物の財産になったと確信しています。

想いを伝える表現を学び、自信を持って個性を発揮

さらに、声による表現を学ぶことで、生徒ひとりひとりが「想いを相手に伝え、人と人とのつながりをつくる」という声の力に気づききっかけを創出することができました。対面ではなく、オンラインでのやり取りが今後益々増えていく世の中において、「画面越しであっても想いを届ける」声の表現方法を学ぶことの重要性が高まっていると考えます。視覚障

害者にとって、オンラインのコミュニケーションは、健常者以上に情報が限られ、利便性が高いというわけではありません。そんな状況においても、自分の想いを伝える豊かな表現を学んだ子どもたちは、自信を持って自分の個性を発揮することができるようになったことは、大きな成果であると思っています。



新型コロナウイルス感染症の影響

出張授業5回およびインクルーシブ合宿のうち、出張授業3回と合宿が、緊急事態宣言の影響で、リアルでの開催ができなくなりました。そのためオンラインに切り替えての開催としました。直接対面できないことによる交流の難しさを解消するために、インクルーシブ合宿は、2日間の集中講義の前に、コミュニケーションタイムの機会を2回設けました。こうした工夫によって、生徒と講師のコミュニケーションの回数を増やしてオンラインによるコミュニケーション不足を解消し、成果を高めるように配慮しました。また、オンラインでの授業で盲学校の生徒が困難さを感じることがないように、画面共有や挙手ボタンなどの視覚に頼る機能の使用はせず、発言の前には名乗るなど、共通のルールを設けて進行しました。

事業名

障害者文化芸術活動推進に向けた 劇場・音楽堂等取組状況調査

団体名

公益社団法人 全国公立文化施設協会

所在地：東京都中央区 URL：https://www.zenkoubun.jp/

事業概要

劇場・音楽堂等にアンケート調査を実施し、誰もが劇場・音楽堂等で積極的に鑑賞や表現活動に参加できる社会とするため現状を把握。今後の取り組みに向けた基礎データを作成する。劇場・音楽堂等においては、調査に回答することで今後の取り組みを考える機会とする。また、障害者を対象とした取り組みをしている施設にヒアリングを実施し、モデルケースとして情報提供することで、他施設の参考となる資料を作成する。

障害者が参加する全国の取り組みを調査・分析し、 さらなる活動の普及を目指す

実施内容

障害者の文化・芸術活動に関して現状を把握し、次なる展開へとつなげる

●障害者文化芸術活動推進に向けた劇場・音楽堂等 取組状況調査

調査期間：2020年10月15日～11月18日

調査対象：劇場・音楽堂等 2,400 施設（国公立施設
2,176 施設、私立施設 224 施設）

回答率：59.3%（国公立施設 61.5%、私立施設
38.4%）

実施内容：障害者の文化、芸術活動に対する取組状
況について、劇場・音楽堂等に調査票を送
付し、調査を行った。（2021年3月報告
書作成）

[ヒアリング先]

- ①東京芸術劇場（鑑賞サポートを中心とした障害者
事業の取組）
- ②KAAT 神奈川芸術劇場（舞台技術を対象とした取組）
- ③じゆう劇場《鳥の劇場》（「じゆう劇場」の取組）
- ④福岡県立ももち文化センター（「表現の面白さを体
感するワークショップ」を中心とした取組）
- ⑤北九州芸術劇場（ダンスプロジェクト「レインボー
ドロップス」を中心とした取組）
- ⑥都城市総合文化ホール（「はぐくみのダンス～障害
のある人もない人も共に踊ろう～」を中心とした
取組）

[主な調査項目]

- ①法律、基本計画等の周知状況、指針、運営方針の
有無
- ②各施設の対応、人材について
- ③事業の取組状況
- ④他の組織との連携状況
- ⑤障害者を対象とした事業を行うことの意義、課題
など

●事例調査（ヒアリング）

実施期間：2020年11月

調査対象：障害者を対象とした取組を行っている劇
場・音楽堂等

実施内容：劇場・音楽堂等で行われている障害者を
対象とした取組についてヒアリングを行い
取りまとめて公開する。



事業の効果

障害者事業に関する取り組み状況を把握

障害者文化芸術活動推進に向けた劇場・音楽堂等取組状況調査は、劇場、音楽堂等に対してアンケートを実施し、その結果を分析することで、障害者事業に関する取り組み状況を明らかにし、今後の取組に生かすことが期待できます。さらに、劇場や音楽堂に関しては、質問に回答することで、自らの施設の取組について再確認をし、今後の取り組みを考える上での参考になると考えられます。まず「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」を職員間で周知している施設の割合は43.3%に対し、主に障害者を

対象とした事業（自主事業）を実施している施設は13.5%にとどまっています。その一方で、“障害者を対象とした事業を劇場・音楽堂等が行うことの意義はあると思うか”という問いでは90.8%が“とてもあると思う／あると思う”と回答をしています。このギャップを生んでいる理由について、障害者による文化芸術活動に意義があることは認めているものの、何をしたらいいのかわからないという精神的な壁、資源の不足（人材・費用・施設）、実施に対するインセンティブの不足などの意見が委員からあがりました。

各地の劇場の取組についてヒアリング

ヒアリングでは鑑賞サポートなどの体制に加えて、実際に障害者が参加できるプログラムを実施している4つの劇場からも具体例を収集しました。この中で、例えば鳥の劇場は、鳥取県鳥取市鹿野町の廃校になった幼稚園・小学校を劇場施設ヘリノバージョンした劇場です。鳥の劇場は、障害のある人とない人が共

に舞台を作り上げる団体「じゆう劇場」をプロデュースしています。じゆう劇場では障害のある人とない人が共に「恋愛」「生死」「欲望」などをテーマとして、シェイクスピアやチェーホフなどを様々な演目を行っています。鳥取県内をはじめ海外でも上演するなど、活動の幅を広げています。

障害者参加型の活動を広く事例収集

北九州芸術劇場のダンスプロジェクト「レインボードロップス」は、障害の有無に関係なくダンスを楽しみ、それぞれの個性を發揮できる場所として取り組みを展開しています。これまでに北九州市障害者芸術祭でのステージ発表や単独ダンス公演「探せ宝を、虹のふもとに！」（北九州芸術劇場 小劇場）を実施。それぞ

れの身体的・性格的個性を生かしたステージパフォーマンスは好評を博しました。このように全国で行われている障害者の参加型プログラムを事例調査し、最終的に取りまとめて公開しました。こうした事例を公開することで、他の施設が障害者の文化活動に関する普及・啓発へつなげることが期待できます。



新型コロナウイルス感染症の影響

アンケート調査・分析およびヒアリング調査などを行ったため、新型コロナウイルス感染症による影響は特にありませんでした。

事業名

多様性を育むダンス&美術プロジェクト ——障害のあるアーティストの発掘&育成、 ファシリテーター育成及び発表の場づくり

団体名

クリエイティブ・アート実行委員会

所在地：東京都港区 URL：http://www.musekk.co.jp

事業概要

同委員会は障害の有無や年齢、性別、民族の違いにかかわらず、自らとコミュニティのアイデンティティを同時に表現できる活動を提供し、新しいアートと社会のあり方を探求してきた。本事業では障害のある人達とない人達がそれぞれ異なる創造性を学び合いながら、美術・ダンス事業において東京・地方でワークショップの実践、ファシリテーターの育成を行った。そのほか美術では東京で展覧会を、ダンスでは横浜と高知で公演を開催した。

障害のある人と障害のない人が共に学び、共につくる ——新たなアートの可能性を追及

実施内容

美術やダンスなどの活動を通じて、多様性を育む

●多様性を育む美術プロジェクト (ワークショップ)

盲学校で視覚障害のある子どもと美術活動を行った経験のある、現代美術作家の西村陽平氏とワークショップを開催しました。また、触覚とアートワークショップシリーズでは、触感の異なる素材を試したり、言葉で表現したりするワークショップと触覚にまつわるトークを開催しました。

開催日：【絵画】2020年8月29日、11月3日、12月6日、2021年2月7・13日【造形】8月30日、10月11日、11月8日、12月5日、2月11日【ファシリテーション】9月19日～20日【触覚とアート】10月24日・25日、12月12日

場所：(東京) 北区文化芸術活動拠点ココキタ／アーツ千代田 3331

●多様性を育むダンスプロジェクト (ワークショップ)

「響と踊ろう」では対話から始まるダンスを企画。「ムーブメント・リサーチから個々のオリジナルな動きを創るダンス・ワークショップ」ではコンテンポラリー・ダンス・テクニックを障害のある人にどのように応用できるのかの探索と、それを元にオリジナルな動きを創る試みを行いました。

開催日：①響と踊ろう (講師：河下亜紀)：2020年

11月29日、12月20日

②ムーブメント・リサーチから個々のオリジナルな動きを創るダンス・ワークショップ (講師：Aya Kobayashi)：2021年1月11日

場所：①池上会館

②巣鴨地域文化創造館

●インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響-Kyo 地方公演

「オープンステイト」や「パワポル」、「しほむように、ひらくような」などの演目を公演しました。

開催日：2020年10月4・16日

場所：①横浜ラポール・ラポールシアター

②高知県立県民文化ホール



インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響-Kyo 地方公演
Tsukasa Aoki

事業の効果

障害のあるアーティストの発掘・育成および発表の場づくり

プロジェクトでは、障害のある人達とない人達が共に創造的な活動をするを通して、新しいアートの可能性を探ることができました。アール・ブリュットと称される障害のある方々の生来の資質が現れた作品が注目を集める中、現代美術の手法を取り入れながら、参加者それぞれが学びつつ、独自の絵画、造形作品を制作していきました。ココキタという同じ場所での定期的な活動によって、人々が集まって

くるようになり、一人ひとりの創造性を生かした作品が生まれてきました。また、それらの作品を展覧会として公開することで、障害者の美術活動の発表の場を作り、多様性に目を向け、受容する機会を社会に広く提示していきました。また、障害者施設や盲学校に点字のチラシを配布したり SNS を積極的に活用することによって、効果的に情報を発信することができました。

質の高い指導者（ファシリテーター）を育成し、質の高い作品を生み出す

活動を有意義にするためには、障害のある方々との表現活動に関心のある、アーティスト力のあるアーティストにかかわってもらうことが大切です。今回、協力してくれた美術ワークショップの講師の西村陽平氏は現代美術作家であり、同時に障害のある人たちや幼児たちとの表現活動の経験豊かな指導者です。ファシリテーションを学びたい方々にとっては、ワークショップに参加しながら、障害のある人たちとの表現活動の可能性を体感することができる場と

なりました。また、パフォーミングアーツの講師の河下亜紀氏、Aya Kobayashi 氏も幅広い経験を持ち、身体障害、知的障害などに広く対応できる指導者です。ダンスにおいては、インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響一Kyo が東京や地方の文化施設、障害者団体と連携を持って、公演とワークショップを展開し、将来、障害のある人たちとの表現活動をリードする指導者の育成を目指しました。



絵画ワークショップ



造形ワークショップ



触覚を探索するワークショップ



響と踊ろうワークショップ

新型コロナウイルス感染症の影響

2020年4月～7月は活動を自粛し、8月から美術のプロジェクトを開始しました。しかし、県をまたいだ移動の制限などから地方での複数回の実施には困難がありました。全体にワークショップの人数を制限したこと、また参加者もコロナの感染拡大状況によってはキャンセルが増えるなど、集客には苦労をしました。これらに対する対応としては、参加人数を制限し、その分オンライン配信によって会場に来られない人に内容を届ける取り組みをしました。ダンスの公演事業でも10月の横浜公演に関して、無観客で無料配信によって開催しました。

事業名

バレエによるインクルージョン促進事業

団体名

公益財団法人 スターダンサーズ・バレエ団

所在地：東京都港区 URL：<https://www.sdballet.com/>

事業概要

当法人では、以前より「リラックスパフォーマンス」による公演を実践している。リラックスパフォーマンス（原語：Relaxed Performance）とは、自閉症やコミュニケーション障害、学習障害などにより通常の劇場環境になじむことが難しい人たちやその家族が、よりリラックスした環境で舞台鑑賞を楽しめるようにと英国で発祥した公演形態。シェークスピア・グロブ座など英国の主要な劇場やバレエ団を中心に広がっている。

鑑賞マナーの緩和や、音響や照明の刺激に配慮、 自閉症やコミュニケーション障害などの人に バレエ公演鑑賞の機会を提供

実施内容

バレエ公演の定番を45分間に凝縮。解説付きで、初めての人にもわかりやすい

チャイコフスキーの3大バレエより「白鳥の湖」、「くるみ割り人形」の2作品をリラックスパフォーマンスの形態で上演。「白鳥の湖」は、悪魔の魔法により白鳥に姿を変えられたオデット姫とジークフリート王子のドラマティックな物語。「くるみ割り人形」は、クリスマスの夜に少女クララが体験する不思議なできごとを描いた夢あふれるファンタジーです。

普通のバレエ公演より少しだけリラックスした雰囲気の中、自閉症やADHDの症状などによりちょっとした支えを必要とする人や、バレエ鑑賞が初めての人でも、構えずにリラックスして鑑賞を楽しめます。

●リラックスパフォーマンス「白鳥の湖」(全1幕) & 「くるみ割り人形」(全1幕)

開催日：2021年1月16日

会場：三原市芸術文化センター ポポロ

参加費：一般4,000円/子ども2,000円。

※子どもは4歳～高校生。4歳未満入場不可

内容：チャイコフスキーの3大バレエより「白鳥の湖」、「くるみ割り人形」の2作品をリラックスパフォーマンスの形態で上演。それぞれ45分間に凝縮し、バレエを初めて鑑賞する人も理解できるようあらすじの解説付き。



「白鳥の湖」より



「くるみ割り人形」より

©Kiyonori Hasegawa

事業の効果

障害のある人たちに、本格的なバレエの鑑賞機会を提供 短縮版でも、オリジナルの魅力を楽しめる

これまで劇場での舞台鑑賞が難しかった人々に、本格的なバレエ公演の鑑賞機会を提供することを目指しました。また、障害のある人だけを対象とするのではなく、障害のある人も一緒に楽しめる公演として提供することで、個々の多様性を受け入れるインクルーシブな社会の実現に寄与することが期待できます。

演目は、バレエを初めて鑑賞する観客、特に次代を担

う子どもを惹きつけるために、バレエといえば誰もが思い浮かべる「白鳥の湖」と「くるみ割り人形」を選択しました。どちらも短縮版でありながら、ストーリーの流れを損なうことなくオリジナルの魅力が凝縮されるよう演出に工夫をしています。また、バレエの予備知識がなくてもストーリーを理解できるようにあらすじの解説をしています。

急な暗転や私語 NG のプレッシャーなど、不安をあおるものを除外 光や音など刺激に配慮、上演中にロビーに出るのも OK

通常の舞台公演鑑賞に含まれる要素の多くが、自閉症や学習障害のある人々にとっては耐え難い困難を伴います。以下のように、鑑賞マナーを緩和し、リラクスのための工夫を行いました。

- ・当日の詳細スケジュールなどを事前に知って不安を軽減してもらうため、特設サイトで情報を提供。
- ・上演中、休憩が必要になれば外に出られる。舞台

- を映すモニターのある休憩エリアをロビーに設置。
- ・開演前に、リラクスパフォーマンス形態（上演中の出入り、照明についてなど）を説明。
- ・客席の照明を完全に暗くしない。
- ・突然大きな音が出る場面では、ボリュームに配慮。
- ・完全な静寂ではなくても、皆で鑑賞を楽しめる環境づくりに努める。

視覚障害・聴覚障害の人の鑑賞サポート付き公演と間違われることも リラクスパフォーマンスのコンセプトを周知させる

これまでリラクスパフォーマンスを実施したなかで、視覚や聴覚に障害のある人の鑑賞サポート付きの公演や通常のバレエ公演と勘違いして来場されたお客様がいました。「リラクスパフォーマンス」のコンセプトを、よりわかりやすく周知することが課題といえます。

また、障害のある子ども・家族のいる家庭にとって、最後まで観ることができるかわからない公演のチケット購入は負担になります。そのような心理的ハードルをできるだけ下げ、障害のある人と一緒に「行ってみよう」と思えるような適正な価格を検討しています。



開演前に物語とマイム（手の動き）の解説



「白鳥の湖」より



「くるみ割り人形」より

新型コロナウイルス感染症の影響

開催地域周辺の特別支援学校でのワークショップ等が中止となり、オンラインなど様々な状況に対応できるよう準備を進めています。公演については、直前の緊急事態宣言発令によりチケットのキャンセル等発生しましたが、PCR検査の実施、開催地域滞在中の行動自粛と感染予防を徹底し、万全の対策を行った上で開催しました。

事業名

社会と知的障がい者施設を演劇でつなぎ 地域のプラットフォームをつくる事業

団体名

一般社団法人 日本演出者協会

所在地：東京都新宿区 URL：https://www.jda.jp/

事業概要

「演劇で人と人、地域・社会と人をつなげる」ことを目標とした事業。福祉施設利用者との取組では、演劇ワークショップをオンラインで実施。表現する楽しさ、共同で創作する楽しさ、自信の獲得を目指し、短編劇を創作し発表。短編劇と報告会は、オンラインでも配信。また、福祉施設職員向けの取組では、身近な素材を使い、遊びながら五感を楽しむワークショップをオンラインで実施。最終回には自作の衣裳で、五感を使う作品をグループごとに発表。ワークショップはオンラインで配信も実施。

演劇表現活動により施設利用者の社会参加を促すとともに、 施設への偏見をなくし、施設及び施設職員の孤立感をなくす

実施内容

好きな食べ物などの自己紹介でスタート。短編劇『奥多摩版桃太郎』の創作・ライブ配信で、成果を発表

施設利用者向けには、好きな食べ物や乗り物を聞き、それらの写真や動画をワークショップの題材として取り入れ、参加者の興味を引き出しました。職員向けワークショップの内容の配信では、参加者と視聴者が意見交換も行いました。

●福祉施設利用者向け演劇ワークショップ

開催日：2020年8月4日～2021年1月12日

会場：東京多摩学園、オンライン

参加人数：44人

参加費の有無：なし

内容：表現・ダンス・音楽に分けたオンライン演劇ワークショップと短編劇「奥多摩版桃太郎」の創作・配信。画面を通して講師と参加者の自己紹介からスタートし、参加者の可能性と魅力を引き出すシアターゲームやワークショップを実施。

●福祉施設職員向けワークショップ

開催日（期間）：2020年9月7日～11月9日

場所：豊島区立心身障害者福祉ホームさくらんぼ・オンライン

参加人数：6名

参加費の有無：なし

内容：「素材で遊ぶ」をテーマにしたインクルーシブシアターのワークショップ。紙チームとプラスチックチームで、最終回では小発表会を行った。各回の内容を録画・編集し配信。

●ドキュメンタリー映像の制作

開催日（期間）：2020年7月～2021年3月

場所：東京多摩学園

参加人数：利用者44人、施設職員複数人

内容：東京多摩学園の生活と演劇活動を、施設職員と専門家が撮影し編集。しいたけ栽培などの農作業の様子、演劇の練習過程、発表会後の鑑賞まで組み込む。



オンライン演劇ワークショップ「奥多摩版桃太郎」



オンライン演劇ワークショップ

事業の効果

楽しみながら連帯感が増し、注目される喜びが自己肯定感につながった

参加者の知的障がいはいは軽度から重度までさまざまで、自閉症や聴覚障がいなど複数の症状を抱える人がほとんどです。当初は、軽度者が積極的でしたが、コミュニケーションゲームなどによって楽しさが伝わり、見学希望から参加に変わる人が増え、最終的には施設利用者のほぼ全員が参加しました。また、大きな効果として、軽度者が重度者をサポート

する場面が増えたことがあります。それまで関わりのなかった利用者同士が関わるようになり、自然に連帯感が生まれ、助け合いが始まりました。

それと並行して、個々の表現力が講師の予想を遥かに上回って発揮されるようになり、即興を活かした発表会につながり、ワンチームで共同創作したことによる喜びと達成感が生まれたとの報告がありました。

福祉施設職員が、言語を超えたコミュニケーションツールを体験

言葉によるコミュニケーションが難しい利用者 と接する職員にとって、言葉に頼らない視覚・聴覚・嗅覚・触覚で人との共有を図る方法を、遊びの中から発見することができたことで、利用者の関心あるものについての探求心を深める効果があったようです。難しいという先入観が次第に消え、子どものように自由に

発想し、身近な素材を使って遊び、楽しむことができるようになりました。ワークショップ5回目には衣装も創作し15分の作品が仕上がりました。演劇のコミュニケーションを通して、参加者同士の知らなかった側面を知ることができ、相互理解を深め、助け合いながら一つの作品を創作する機会となりました。

施設や利用者たちの魅力を紹介し、心のバリアフリー化を促進する

一般の人が知的障がい者の生活を目にする機会はほとんどありません。現実問題として、首都圏に知的障がい者施設をつくるのは周囲の反対から難しいため、地方につくられる傾向があると言われています。知らないことで生まれる心のバリアーをなくし、本当の共生社会を創り出すために、福祉施設間のネットワークを

広げる目的でドキュメンタリー映像を施設や団体に発信したことに対して、さまざまな喜びの感想が届いています。また、被写体である利用者の皆さんは、撮影対象となることで自意識に変化が起り、自己肯定感の向上や、自分が何者であるのかあらためて考える機会になりました。



オンライン演劇ワークショップ



福祉施設職員さん向けオンラインワークショップ

新型コロナウイルス感染症の影響

施設を訪問できず、全回オンライン活用としました。講師の指示を参加者に伝えるのに、職員の補助が必要となり、補助と参加者の自主性の兼ね合いが課題となり、講師の意向で伝わらない場合はそのままよいことにしました。職員向けワークショップには、素材の質感や音を言葉で伝えあう内容を取り入れましたが、嗅覚はマスク着用などで困難でした。

事業名

やってみようプロジェクト

団体名

公益社団法人 日本劇団協議会

所在地：東京都新宿区 URL：http://www.gekidankyo.or.jp/

事業概要

コミュニケーションワークショップを通してつながりを持ち、生きづらさを感じることのない「共生社会の実現」を目指して活動している。今回の事業では地域の劇場やNPO・福祉施設などと連携し、多様な「社会包摂型プログラム」を展開。共有する楽しさ、コミュニケーションの楽しさなどを体感するワークショップを開催し、さらにこのような活動が参加者・社会に与える影響について調査分析を行った。

障害者や高齢者、外国人などすべての人が 社会とつながる共生社会を目指す

実施内容

共有する楽しさ、コミュニケーションの楽しさを体感できるワークショップを開催

次のようなワークショップを沖縄から東京まで、全国10か所で開催しました。

●聴覚障害青年部

コミュニケーションワークショップ
「聴覚障害のある人とない人が共に楽しめるワークショップ」をテーマに手話が通じない中でのコミュニケーションを楽しむプログラム。

- ・開催日：2021年1月11日
- ・対象：聴覚障害・難聴者とその家族

●さいたま市若者自立支援ルーム

演劇ワークショップ
演劇ワークショップを通して交流し相互理解を深め、表現にチャレンジして自信を持つようになることを目指す。

- ・開催日：2020年10月13日～2021年1月21日
- ・対象：自立支援ルームを利用する青少年



手話に頼らず「わからない」を楽しむ「聴覚障害者対象 コミュニケーションワークショップ」

●からだであそぼう

自由に表現することの楽しさを体感し、コミュニケーションを楽しむワークショップ

- ・開催日：2021年2月27日、28日
- ・対象：児童養護施設「杉並学園」に入所中の子どもたち

●からだであそぼう

老人福祉施設「あきつのもり」とオンラインワークショップ。発声方法から言葉あそび、無理なく身体を動かすプログラム。

- ・開催日：2021年1月19日～2月16日
- ・対象：デイサービス利用者を中心とした認知症の高齢者

●若者演劇ワークショップ in 東京

- 作品「big brother」を発表。
- ・開催日：2020年9月29日～11月9日
 - ・対象：就労、就学していない青年

※在日外国人の交流企画は中止となりました



地域ボランティアを対象にした「青葉町安心ねっと からだであそぼう」

事業の効果

コミュニケーションワークショップを通じて社会とつながる

本事業は、芸術団体が行う演劇ワークショップの社会的価値を可視化し、その価値を共有することを目的にスタートしました。現代社会には、さまざまな理由から生きづらさを感じている多様な立場の人がいます。そのような人たちが排除されることのない

「共生社会の実現」を目指し、社会的に阻害されがちな立場にある人がワークショップを通して周囲とつながりを持ち、社会参加の機会を得ることを狙いとして実施しました。

就労や引きこもり解消、自立度の改善などさまざまな効果を報告

これまで当法人が行ってきた演劇的手法が、さまざまな社会課題解決につながることで報告されています。若年無業者対象のワークショップでは、参加者の半数以上が就労したり、引きこもりがちだった参加者が旅行に行くなど、参加者に積極的な変化が見られました。高齢者施設ではワークショップ後に参加者のIADL(自立度)の数値が改善。認知症による精神・行動面の症状が改善され、投与する向精神薬の量を減らすことができたという効果も得られました。外国

人対象ワークショップでは地域住民との交流が活性化するなど、本事業は対象者に社会参加の機会を与え、QOLを高める効果があると考えられます。

なお、これらのワークショップ開催にあたっては、高齢者、障害のある人など、すべての人が無理なく参加できるよう、プログラム設計やサポート体制を十分に準備しました。生活環境などを共有し、専門家からアドバイスを受けてバリアフリーな環境にも配慮しています。



参加者が安心して日本語が使える場「にほんであそぼう」ワークショップ



「さいたま市若者自立支援ルーム（桜木）演劇ワークショップ」の様子

新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症予防に関して、当事業のワークショップの多くは協働先の施設内で実施するものが多く、立ち入りは制限され困難をきたしました。協働先と状況把握に努めながら日程の延期、会場場所の変更、募集人数の制限など工夫し実施に向け対応しました。

今後もこのような事態が想定されることから、オンラインなどICTを活用したプログラム開発、ソーシャルディスタンスを保ちながらのプログラムデザインの組み方等、講師がお互いに状況共有をしながら研究を進めています。

感染防止対策としては、当法人の「新型コロナウイルス感染防止のためのガイドライン」を基本とし、感染予防を以下のように徹底しました。

- ・ 講師、スタッフの2週間前からの行動履歴記録。参加者の連絡先の把握。
- ・ 検温、体調管理、マスク・フェイスシールドの着用、アルコール消毒の徹底。
- ・ 道具を利用する場合は使い回しを避ける。
- ・ 関係者の出入りは必要最小限にとどめる
- ・ 大きな声を出す、身体の接触を伴うプログラムは見直し、ほかの方法にて対応する。

事業名

プロの音楽家を介在した インクルーシブ体験の創造

団体名

公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

所在地：東京都墨田区 URL：https://www.njp.or.jp/

事業概要

児童が主体的に参加できる音楽鑑賞体験などを実施した。具体的には、実施団体所属のプロ演奏家が、小学校の特別支援学級・通常学級を対象として、鑑賞・楽器・創作体験の場を提供。実際に楽器に触ったり、弓の使い方やヴィブラート奏法に注目して「良い音とは?」「良い演奏とは?」を考えた。また、鑑賞を通じて児童ひとりひとりの感じ方の違いを知り、互いを認め合いコミュニケーションを図ることを目指した。

プロの演奏家ならではの視点を生かし、 主体的な音楽鑑賞を学ぶ

実施内容

流行曲ではなく、あえて本格的なクラシックの名曲の鑑賞に挑戦

●①弦楽四重奏の名曲を鑑賞する

②日本一ハープに詳しい小学生になる

開催日：① 2020年12月16、17日

② 2020年12月23日

場所：墨田区立業平小学校

短い曲や分かりやすい作品ではなく敢えて初めて聴く本格的なクラシックの名曲を、通常のコンサートホール等での演奏会に近づけた状態で鑑賞（全楽章通して聴く等）した。単に受け身で聴くのではなく、楽曲や楽器の紹介、奏法の説明を通じて、鑑賞の積極的な楽しみ方を児童各自が体験した。また、ハープは児童全員が実際に触って音を出した。

●木琴の超絶技巧を間近で鑑賞する

開催日：2020年2月3日

場所：墨田区立第一寺島小学校

木琴を中心に打楽器の歴史を通じて、叩けば誰でも音が出せる打楽器が世界各地で多様な発展を遂げた

ことを知った。2、3人のグループワークで、数点の木片を叩いて音の低い順に並べ、木琴づくりを体験。自分たちで作った木琴を使って、実際に「鍛冶屋のポルカ」の演奏に参加した。最後に学校の木琴を借りて演奏される黛敏郎作曲の「木琴小協奏曲」を鑑賞し、楽器に対して親近感を持つとともに、技巧的な演奏を間近で感じた。

●いい演奏とは何かを考える

開催日：2020年12月10、11日

場所：河津町立西小学校、河津町立東小学校

弦楽器の音当てクイズで、同じ音でもヴァイオリン・ヴィオラ・チェロでは音色が異なることや、人によっても「柔らかい」「温かい」など感じ方が違うことを知った。また、プロの演奏家がどのように美しい音で演奏するのかを弓の使い方やヴィブラート奏法を例に考えた。



墨田区立業平小学校でのヴァイオリンとハープ演奏の様子



墨田区立第一寺島小学校での木琴づくりワークショップの様子



河津町立東小学校での楽器体験の様子

事業の効果

楽器に触れ、音色や奏法の違いを知り、主体的な音楽鑑賞を体験

一般的な音楽鑑賞教室は、児童が演奏を聴くだけの受動的な関わり方になりがちです。本事業では簡単なルールを知ることによって楽しめるスポーツのように、楽器を演奏できなくても「知っているから楽しい」「違いが分かるから面白い」と感じられる取組を実施しました。ヴァイオリンやチェロ、ハープの楽器

体験、また木琴の制作体験を通じて、児童の多様な反応を得られ、積極的な参加姿勢が見られました。また楽器の音色の違いやヴィブラートの弾き方の違いを通じ、演奏や聴き方の多様性を知り、異なる個性の自他を認め合う意識を育てていくことを目指しました。

プロのオーケストラ奏者ならではの本格的なクラシック作品を紹介

児童が飽きるという理由で、短い曲や流行のアニメやポップミュージックのアレンジを取り上げる音楽鑑賞教室が少なくない中、弦楽四重奏やハープのために作曲された本格的なクラシック作品を取り上げました。鑑賞前に曲の構成や作品中の各楽器の役割、作曲の背景等を、イラストや例えを用いて説明。言葉だけでは伝わりにくい場合があることを想定して、映像モニターなども使用し、視覚的にも分かり

やすい説明を心掛けました。その上で、各奏者がその作品の好きな箇所とその理由を紹介するなどして、主体的な鑑賞の手助けと成り得る導入を行いました。その結果、10～15分の作品を集中して鑑賞する児童の姿が見られました。特に気持ちや情景など、具体的なイメージを描ける説明に対して、児童の活発な反応を得ることができました。

地域を面でもとらえて文化芸術の創出機会を増やしていく

今年度は特別支援学級に加えて、通常学級での実施も実現しました。また、新たな学校、地域での実施も実現し、事業の拡大を図ることができました。本

事業に新たに参加する指導奏者も追加し、指導側の理解促進・経験蓄積を図りました。



河津町西小学校での楽器の音当てクイズの様子



墨田区立業平小学校での弦楽四重奏演奏の様子

新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症の拡大により、予定していた実施校が複数中止になりました。また、学校によってはソーシャルディスタンスを十分に確保することが難しいとの理由から楽器体験などのプログラム実施を見送ることとなり、内容の一部を変更しました。楽器体験やグループワークを実施する場合は換気・消毒を徹底し、体験が出来ない場合は代わりにモニターを使って楽器の細部を見せるなどの工夫をしました。

事業名

国際芸術祭実施に向けての ろう者の芸術活動推進事業 2020

団体名

社会福祉法人トット基金 日本ろう者劇団

所在地：東京都品川区 URL：<http://www.totto.or.jp/>

事業概要

演劇分野では、2018年度より継続の国立能楽堂における手話狂言公演及び小野寺修二氏とのコラボ企画。新しい演劇表現を創出する作品「野鴨」はワーク・イン・プログレスで実施し、我が国の演劇活動の活力と未来志向を披露した。美術分野では、「ヨコハマトリエンナーレ2020」を開催する横浜トリエンナーレ組織委員会と協力し、美術鑑賞WSを実施するほか、障害の特性による身体的感覚を研究する講師などを招いての講演を行った。

ろう者の国際芸術祭の国内開催を目標とし、 ろう者・難聴者の芸術活動の発信ならびに事業展開を行う

実施内容

創作途中の状態を作品を観客に披露し、出演者と観客で意見交換を行う

「野鴨」の公演の創作開始は4月から、本公演は7月という予定を新型コロナウイルスの影響で変更。本公演ではなく、「ワーク・イン・プログレス」（創作途中の状態を作品を観客に披露し、意見交換を行い、その後の作品づくりに取り入れる方法）で公演しました。育成×手話×芸術プロジェクト「アートを通して考える2」では、言語や人種、政治、ジェンダー、身体のあらゆる境界を超える力をもつアートを通して、ろう者と聴者がともに考え、語り合うセッションを開催。また、3年に1度の現代アートの国際展「ヨコハマトリエンナーレ2020」の開催に合わせ、横浜トリエンナーレ組織委員会との共催で、ろう者のための美術鑑賞プログラムを企画。聴者とろう者のディスカッションでは、第一回に東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授 伊藤亜紗氏、宮城大学特別支援教育講座准教授 松崎丈氏を招き、多様な身体性をもつ人々の感覚に注目し、その異なる感覚の可能性についてお話しいただきました。そのほか、視覚身体言語を研究するSignedのメンバー、ろう者のパフォーマンス/アーティストの南雲麻衣氏、CODAのインタープリター和田夏実氏の活動の紹介とともに、「ことば」だけではないコミュニケーションの可能性を探りました。

●小野寺修二コラボ企画「野鴨」制作WS & 発表
稽古期間：2020年6月29日～7月20日（全14日間）トット文化館、現代人形劇センタースタジオ

発表：7月19日（45分上演、30分意見交換）

公開稽古：7月20日

会場：シアターX（両国）

演出：小野寺修二（デラシネラ）

出演：9人（ろう者5人、聴者4人）

来場者数：7月19日50人、7月20日3人

●2020年度 育成×手話×芸術プロジェクト
「アートを通して考える2」

開催日：2020年9月19日、10月25日、31日、
11月8日

場所：オンライン／横浜美術館

来場者数：4回合計182人

参加費：無料



2020年度 育成×手話×
芸術プロジェクト
「アートを通して考える2」
チラシ

事業の効果

「野鴨」制作 WS & 発表では、すべてを表情と身体で表現。観客の創造を掻き立てた

公演ではなく「ワーク・イン・プログレス」での実施に、劇場のシアターXから「創作に時間をかけることは大変よい取り組み」と評価され励みとなりました。客席50%制限で定員50人となりましたが、あっという間に満席になり、期待の大きさを感じました。

感染症予防で会話を控えなければならないことを逆手に取り、声はもちろん手話も使わず、すべて表情と身体で表現したことによって、観客はさまざまな想像を刺激されたようです。トークでもさまざまな質問が出て、予定時間を超えるほどでした。

「アートを通して考える2」にろう通訳をつける試み。考察の機会が増え、議論が活発化

「アートを通して考える2」では、全回にろう通訳をつける試みを実施。ろう通訳のスキルを身につけたろう者当事者が、聴者の話を日本手話に翻訳し通訳することで隠された意図や意味が伝わり、トークの本質を共有しやすくなりました。その結果、ろう者参加者が自ら考察する機会が増え、議論が活発化しました。

作品鑑賞では、美術館の学芸員たちと聴者の世界とろう者の世界を繋ぐろう者が、企画段階から共同で

計画することで、ろう者・難聴者が希望する形を提供することができました。ろう者・難聴者がもつ文化的性質を通じた視点からの作品への見解と解釈を共有することができ、また参加者（当事者）たちから現代アートを鑑賞することの意義と喜びを知ることができたという声が多く寄せられたことは大きな収穫です。ろう者と聴者、互いの知覚や感覚の共通点や違いを共有する場をつくる試みは、芸術における新たな表現や考察の可能性を広げました。

マイノリティである当事者がマジョリティになる状況をつくる

2006年に国連が障害者人権宣言を採択した際のスローガンは「No Decision without us～私たち抜きに私たちのことを決めないで～」でした。（日本は2014年に批准）。このことは簡単なようで、実は難しいのです。本事業においては、当事者であるろう者

が主体となって事業を担当し、自らを育てながら事業を進めることに重点をおいています。マイノリティである当事者がマジョリティになる状況をつくることは、実りのある生き生きとした事業成果につながります。



「野鴨」小野寺修二氏演出のもと稽古を行いました。



「野鴨」ワークインプログレス実演の様子

新型コロナウイルス感染症の影響

稽古日程調整、メンバーやスタッフへの連絡、社会状況を注視しつつ判断し進めるなど大きな負担となりました。実施形態を変更し、公演関係者へのPCR検査など、東京都や業界団体が定める感染防止対策ガイドラインに沿って取り組みました。稽古期間中は感染対策をとり、毎回の検温、手指消毒、常時換気を行いました。

事業名

チェルフィッチュ「消しゴム山」 東京公演 鑑賞サポート

団体名

一般社団法人 チェルフィッチュ

所在地：東京都目黒区 URL：https://chelfitsch.net/

事業概要

チェルフィッチュ最新作『消しゴム山』を、独自の鑑賞サポートを設けて上演。同作品は、海外有数のフェスティバルから招聘されてきたもので、国際水準の作品を障害の有無にかかわらず楽しめるように企画した。日本語字幕・英語字幕、作家が制作したエクストラ音声貸出、劇場最寄駅への送迎、手話通訳や筆談による接客対応、鑑賞マナーを緩めた上演回を設けるなど、さまざまな情報保障（鑑賞サポート）を行い、現代演劇を代表する演劇カンパニーとして多様な観客の鑑賞機会の拡大に努めた。

多くの劇団や作家が障害者の芸術参加に取り組めるように、 情報保障を取り入れた現代演劇上演のモデルケースを示す

実施内容

舞台からの音情報と作家書き下ろしテキストのナレーション音声によって、あらたな鑑賞体験を生み出す

2019年10月初演の演劇作品は、さまざまな空間で形を変えて展開し、新しい形で東京公演を実施。音声ガイドのアナウンスも、上演の構成要素の1つとなるなど、新しい試みを体験できます。

●チェルフィッチュ「消しゴム山」

東京公演 鑑賞サポート

開催日：2021年2月11日～14日（全6公演）

会場：あうるすぽっと

（豊島区立舞台芸術交流センター）

料金：障害者割引 3000円（前売・当日同額、介助者1名まで無料） ほか

【エクストラ音声貸出】

対象：限定なし（視覚障害者優先）

参加人数：最大50人程度

貸出料：無

内容：通常回上演の構成要素に、ナレーション音声を重ねるパナガイド機器を貸し出す。作・演出の岡田利規の書き下ろしたテキストを、俳優・映画監督の太田信吾が読み上げるという、一般的な音声ガイドとは異なる方法で制作。上演の音と合わせて聞くことで、作品の新たな鑑賞の観点が立ち現れるような、視覚障害者だけに限らず楽しめるオリジナルの音声ガイド。

【鑑賞マナーハードル低めの回】

内容：観劇中にしゃべってしまう子どもや、障害により長時間に及ぶ上演中に休憩が必要になる人などが安心して鑑賞できる環境をつくる。劇場受付、ロビーで手話通訳者が聴覚障害のある来場者対応を行う。車椅子利用者、視覚障害者などには、最寄駅への出迎えにも対応。

【全公演共通鑑賞サポート】

内容：全公演日本語・英語字幕付き。客席には車いす席を設け、客席までの移動に時間がかかる人や、小さな子ども連れの人は、一般客席開場時間よりも前に入場できる優先入場を実施。受付などに筆談ボードを設置。



日英字幕投影の様子（『消しゴム山』京都公演） | 撮影：守屋友樹
提供：KYOTO EXPERIMENT 事務局

事業の効果

観劇環境のアクセシビリティを向上させ、多様な観客に出会う

あらゆる人が来場・鑑賞しやすい環境をつくりました。公演の周知については、子どもや障害者にも情報が行き渡るように広報物の文章などを工夫するとともに、ウェブサイトでは、音声読み上げが可能なテキストや会場へのアクセス情報を採用。チケット予約方法も工夫しました。

上演については、日本語字幕・英語字幕、「エクストラ音声」といった情報保障を独自のアイデアで実施。観劇に困難を感じる人も来場しやすいようにする「鑑賞マナーハードル低めの回」の設定や、車いすや補助犬を利用する人のための客席設計を行いました。

既存の演劇手法にとらわれない表現を探求する演劇カンパニーが、新たな情報保障を展開

作品の鑑賞において障害を補完するような観点だけではなく、視覚情報や音情報などがもたらす作品上の効果に注目し、それらを生かすような取り組みを検討することで、より豊かな鑑賞体験につながる情報保障を行うことができます。

今回の情報保障（鑑賞サポート）の企画において、当事者団体へのヒアリングや、取り組みを体験してもらっての意見交換を行いました。これにより提供側が見落とすような点を指摘され、それを生かして内容を充実させることができました。

さらに上演作品の作・演出を行うチェルフィッチュ主宰・岡田利規との創作的な観点からの検討を通し

て、単なるサポートに留まらない、新たな創造性やアイデアにつながるような「エクストラ音声ガイド貸出」や「鑑賞マナーハードル低めの回」といった取り組みに挑戦しました。

実施に向けては、俳優やテクニカルスタッフとの意見交換も行い、舞台作品に関わる者それぞれが情報保障について考える機会となりました。最先端の現代演劇公演で、創造性をもって情報保障に取り組み、主催者側にとっても観客にとっても作品を深めることができるという上演のモデルケースを残すことを目指します。



視覚障害者の方をご案内する様子（『消しゴム山』京都公演 タッチツアー）



チェルフィッチュ俳優によるワークショップの様子（2019年実施）
© コネリングスタディ、山吹ファクトリー

新型コロナウイルス感染症の影響

視覚障害者と子どもを対象としたタッチツアー、聴覚障害者向けに音に反応するクッションと骨伝導を利用したポーチからなる体験音響システムの導入、子ども向けプレワークショップイベントを予定していましたが、観客同士またスタッフとの接触、舞台及び舞台美術への接触を避けるため中止。視覚情報の保障かつ視覚障害者以外も楽しめるものとして内容を充実させた「エクストラ音声」を制作。子ども向けプレワークショップはオンラインで実施し、聴覚障害者も参加できるよう手話通訳をつけました。

事業名

新国立劇場主催演劇公演における 観劇サポート

団体名

公益財団法人 新国立劇場運営財団

所在地：東京都渋谷区 URL：https://www.nntt.jac.go.jp/

事業概要

当財団は劇場の運営理念として「世界水準の舞台をつくること」「社会との関わりを大切にすること」を掲げている。本事業を通じて、障害の有無にかかわらず、良質の舞台を楽しめる機会を広げ、さまざまな人々が訪れる「開かれた劇場」としての発展を目指す。チケットの購入、来場、観劇、帰宅に至る各段階にあるハードルを下げ、舞台鑑賞をトータルで支援することを目的とする。

主として聴覚、視覚に障害のあるお客様に、より気軽に、より深く舞台芸術を楽しんでいただくことを目指す

実施内容

チケットの購入から、来場、観劇、帰宅に至るまでにあるバリアを軽減

新国立劇場小劇場または中劇場での公演に、聴覚障害・視覚障害のある人向けに鑑賞サポートをつけ、総勢90人（うち障害者51人）が参加しました。

サポートのうち、ポータブル字幕機の貸出によりセリフ、音響情報をリアルタイムで表示し、聴覚に頼らなくても舞台を楽しめる環境をつくりました。登場人物の名前の色を替えて表示する、丁々発止のやり取りをテンポよく切り替える、大声のセリフを太字にするなど、字幕の表示方法にさまざまな工夫を凝らしました。また、効果音についても、どのような調子で、どんな楽器によって演奏されているのかを表示し、演出の魅力を伝えるようにしました。

●聴覚に障害のある方向けの観劇サポート

開催日・演目：

① 2020年7月18日

「願いがかなうぐつぐつカクテル」

② 8月10日「イヌビト」

③ 12月20日

「ピーター&ザ・スターキャッチャー」

内容：ア) ポータブル字幕表示機貸出による、

文字化したセリフ、音響情報の送付

イ) 会場内の掲示および案内サインの強化

ウ) 手話通訳、要約筆記者の配置

エ) 手話、字幕入の宣伝動画作成

オ) 障害に対応した割引チケットの予約を、電話に依存せずにインターネットやFAXで完結できる仕組みの提供。

●視覚に障害のある方向けの観劇サポート

開催日・演目：

① 2020年7月25日

「願いがかなうぐつぐつカクテル」

② 8月13日「イヌビト」

③ 12月25・26日

「ピーター&ザ・スターキャッチャー」

内容：ア) 公演前の舞台説明会開催（舞台を模した大道具、小道具に触る体験を含む）

イ) 音声によるプログラムの提供

ウ) 触れる模型の作成および模型を用いた舞台セットの解説

エ) 劇の進行と同時に物語を理解できるリアルタイム音声解説

オ) 最寄り駅改札口と劇場間の案内係による付添



貸出を行うポータブル字幕機



会場で配布する、放送によるアナウンスを文字可した書面、劇場内の見取図

事業の効果

舞台に関する情報保障のいろいろ。実況生中継のような音声ガイドで、臨場感たっぷりに

視覚障害のある人向けに、登場人物がどれほどの広さの場所で、どのように行動するのか、装置や小道具・衣裳はどのような形か、頭の中に劇場を組み立てられるように、実際に歩き小道具など触りながら解説を聞くタッチツアーを提供しました。新型コロナウイルス感染症の影響で参加者は舞台上げられなくなり、館内の別場所にほぼ同縮尺のステージを仮設しました。

見どころ、あらすじや出演者自身によるキャラクターの自己紹介を収録した音声プログラムを提供し、出演者の声を事前に知ってもらいました。

上演中の音声ガイドでは、役者はどんな体勢か、誰が入ってきたのかなど、ナレーターが実際の舞台を観ながら別ブースより「生放送」で同時解説を行い、臨場感たっぷりに舞台を鑑賞できるように工夫しました。

手話通訳、案内サインの強化、チケット販売の工夫など、舞台以外に関する情報保障

聴覚障害のある人向けに、放送によるアナウンスを文字化し書面で渡しました。場内の見取り図も用意しました。当日は、手話通訳または要約筆記による案内係が常駐し、チケットの受け取りから字幕機の使用方法、来場者カードの記入（感染症対策）などを説明しました。

また、案内サインを大きくわかりやすくし、各所に設置。口頭での案内を減らすことができ、新型コロナウ

イルス感染予防の効果も得られました。

視覚障害があり単独で観劇する人向けには、案内係を増員し、劇場内の案内はもとより、最寄り駅改札までの付添を行いました。開場中、休憩中には、上演開始までの残り時間を適宜アナウンスしました。

チケット購入については、インターネットやFAXで完結する仕組みを提供。電話を使わずに済みます。

舞台制作側と観劇サポートスタッフで綿密に意見交換。「見どころ」をわかりやすくする

「公演の見どころ」は、どの観客にも共通で、観劇サポートには、演出家、美術家、衣裳家、出演者などの意図を十分に盛り込むことが求められます。そのため、舞台制作現場と観劇サポート担当スタッフとで綿密な意見交換を行えるようにしました。また、観劇

サポート担当スタッフには、舞台芸術全般に関する広範な理解も求められます。

なお、「迷ったら障害当事者に聞く」ことも重要。障害当事者、団体はもとより、類似事例を先行実施する団体から学ぶことが必須です。



事前舞台説明会：小道具体験



新型コロナウイルス感染症の影響

実施の決定が遅くなり、広報、宣伝が制限されるとともに、準備時間が十分に取れず、内容を一部変更せざるを得なくなりました。サポートにあたって身体接触を避けられない視覚障害がある人には、手袋を配布し、装着をお願いし、スタッフも手袋を必須としました。また、募集人数の上限を減らし、1回の参加人数を押さえ、開催回数を増やしました。

事業名

社会的養護のもとにある障害児等による 地域間交流から生まれる パフォーマンス作品の創作と発表

団体名

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

所在地：東京都豊島区 URL：<https://www.children-art.net/>

事業概要

社会的養護のもとで暮らす子供たちが、文化芸術活動を通して、共に作品を創作し、それを社会に発信することで、彼らの社会参加を促進し共生社会の実現を目指して活動している。本事業では2つの地域（東京都小平市、埼玉県さいたま市）にある児童養護施設で暮らす子供たちが、音楽やダンスなどの文化芸術活動を通して交流し、共に作品創作を経験するワークショップを行う。また、その成果や課題を伝えていけるようなコラムを作成し、当NPOのウェブサイト上で公開する。

社会的養護のもとで暮らす子供たちが、文化芸術活動を通じて 交流し、共に作った作品を社会に発信する

実施内容

児童養護施設の子供たちが共同制作を通じて交流を図る

<ワークショップの実施>

2020年10～2月の間に合計で7回のワークショップを実施しました。東京都小平市と埼玉県さいたま市にある2つの児童養護施設の子供たちが音楽やダンスを通して交流し、共に作品を作り上げる体験を提供しました。新型コロナウイルスの感染拡大の影響もあり、施設の出入りが制限されたことから、オンラインを活用して交流の場を作り上げました。

<コラムの作成>

ワークショップに参加した子供たちや、児童養護施設職員の方々にインタビューを行い、コラムを作成しました。作成したコラムは2回にわたり、当NPOのウェブサイト上で公開しました。

開催日（期間）：2020年4月30日～2021年3月31日

場所：東京都小平市、埼玉県さいたま市等

対象：幼児～19歳

参加人数：16人

参加費の有無：無料



画面越しに、一人ずつ自己紹介。互いの施設の子に興味を持つ。



音楽を共有しながら、みんなで一緒に身体を動かす。

事業の効果

ダンスを通じて自己表現し、社会活動を促進

ワークショップ開催2年目ということもあり、子供たちの意欲が昨年度以上に高く、コロナ禍でのオンライン開催という状況にもかかわらず、積極的に参加していました。また、相手の施設の子供たちに興味を持って関わろうとしたり、やってみたい楽器を伝えたりするなど、子供たちの交流が深まり、自己表現も豊かになってきています。普段の生活にいろいろ制約が生じている中で、ダンスや音楽を通して

外部と関わり、自己表現する場があることは貴重な機会となっています。障害のほか、被虐待経験の生い立ちや引きこもりなど、様々な理由で社会との接点を持ちづらい人たちが、思い思いの表現活動に取り組み、その思いを音楽やダンスという形で社会に伝えていくことで、彼らの社会参加の促進が期待できると考えています。

コラムを作ることで社会に発信し、社会から施設への理解を深める

コラム作成による効果としては、ワークショップに参加している子供たちや、児童養護施設の職員の話を聞くことで、相手がどのような思いを抱いているのか、理解が深まりました。コロナの影響もあり、ワークショップの再開まで日が空いてしまいましたが、その間も子供たちがワークショップを楽しみにしてくれていたことが励みになりました。また、新

たな試みであるオンライン開催に関して、どのような課題があるかなども、取り組みを進める中で少しずつ明らかになりました。児童養護施設に暮らす当事者である子供たちの言葉を、広く一般に伝える機会を作れたことは、社会から施設に対する理解を深めることにもつながると思います。



アーティストの声かけに沿って、自分の名前からダンスを創作する。



インタビューに答えてくれる高校生たち。

新型コロナウイルス感染症の影響

児童養護施設カルテットが、新型コロナウイルス感染症対策のため、外部からの出入りが制限され、加えて施設外での活動もできなくなってしまいました。また、発表やトークセッションをホールで開催して、不特定多数が集まることや、関西在住のアーティストが東京に訪来することも、感染のリスクを考慮して、難しくなりました。こうした影響への対応として、ワークショップは、オンラインで2つの施設と関西在住のアーティストをつないで実施しました。対面できない状況でも、子供たち同士や、アーティストとの交流が生まれるように、ワークショップの内容や、タイムスケジュールを工夫しながら開催しました。オンラインでワークショップを開催する際は、アーティストが子供たちに直接的なサポートをすることが難しいので、職員の方々が子供たちと一緒に参加すること、また技術的なサポートをしてくださることが必要不可欠でした。

事業名

ホスピタルシアタープロジェクト 2020— すべての子どもたちと家族のための 多感覚演劇の上演

団体名

特定非営利活動法人 シアタープランニングネットワーク

所在地：東京都多摩市

URL：http://www.5a.biglobe.ne.jp/~tpn/index2.html

事業概要

劇場で鑑賞できない知的障がい児や肢体不自由児などが周囲に気がねすることなく、家族とともに鑑賞できる演劇を創造し、提供することを目的に活動している。本事業では五感を刺激する多感覚のインクルーシブ・シアターを創造し、上演したほか、アートマネジメント・インターンシップの実施、その効果を検証するための報告書の作成、成果の国内外への発信などに取り組んだ。

知的障がい児や肢体不自由児とその家族が、 気がねなく演劇鑑賞できる場の創造

実施内容

すべての子どもと家族のための多感覚演劇を創造し、巡演

●インクルーシブ・シアターの創造・巡演

すべての子どもたちと家族のための多感覚演劇を『森からの贈りもの』と題し、1公演当たり4家族を対象とした45分の作品を創造し、巡演を行いました。衣装・装置に工夫を凝らすことで、感染症対策がもたらす制約をポジティブなものへと転換することができました。

開催日：2020年11月14日他、計7日

対象：親子・障がい児・者

参加人数：41家族（大人62名、障がい児・者・子ども65名、見学26名）

●アートマネジメント・インターンシップの実施

アートマネジメントを学ぶ学生が、創造過程や感染症対策、観客とのコミュニケーション、報告書の作成に参加するとともに、理念やシステムをめぐって、様々な議論を行いました。

対象：アートマネジメントを学ぶ大学生

参加人数：1名

●報告書の作成・頒布

2021年3月1日発行

アンケートだけではなく、会場のオーナー、参加した芸術家、参加家族などの声を拾うことで、インクルーシブ・シアターの重要性と今後のあり方を検証しました。

対象：一般、学生、舞台芸術関係者、行政等。

頒布価格：1,000円



雲からは雨と優しい香り



木洩れ日のシークエンス

事業の効果

困難な時期における安全な遊び、楽しみの場を提供できた

知的障がいや肢体不自由などにより、新型コロナウイルス感染症禍、一切の外出を控えていたご家族が何組もありました。事業によってこれらのご家族に安心して過ごしながら、美しいライブのパフォーマンスを鑑賞していただくことができました。例えば、発語のないお子さんであっても、声を出して笑われていたことに、ご家族は大変喜ばれました。また、

外出する機会が少ない重度心身障がいでは声は出せない友達同士が、車いすを寄り添いあわせて、お互いの存在を喜んでいる姿に心を打たれました。帰らなければならないとわかったとき、31歳の障がい「児」は涙を流し始めました。障がいのない兄弟姉妹もまた、子供らしく周囲に気がねすることなく、徹底的に楽しんでいただくことができました。

アートマネジメントを学ぶ大学生にインクルーシブを体験的に指導した

アートマネジメント・インターンシップの実施では、アートマネジメントを学ぶ大学生にインクルーシブの理念やシステム、課題を体験的に指導できました。学生は通常の演劇制作は理解しているもの

の、インクルーシブについては未知の領域です。そうした未知の領域について体験的に指導し、インクルーシブへの理解を深めることができました。

報告書を作成することで、成果を形に残し、知識を分かち合うことができた

報告書を頒布することによって、公演とその成果を記録として残すことができました。多くの場合、公演を実施してそれで終わってしまいがちですが、記録やアンケート分析、寄稿による報告書を作成・頒布することで、形として残すことが可能になります。ま

た報告書の頒布により、学生や実践家への周知と知識の分かち合いが可能になります。また英文を含んだビデオの配信とITYARNでの基調講演によって、日本のインクルーシブ・シアターの最前線の理念と実践を海外に発信することができました。



カンパニー・オブ・ホスピタリティ

新型コロナウイルス感染症の影響

予定していた都心の公演会場を借りることができず、会場探しに苦心しました。最終的に民間団体の会場を借りることができ、観客数を1公演当たり6組から4組へと減らしたり、マスクを衣装の一部として考え、ビニールシートを装置の一部として活用するなどの工夫をして開催しました。公演後は子どもも大人もビニールシートに葉っぱを貼りつける遊びをするなど、感覚を刺激しながらも、子どもたちに直接触れない工夫を採用しました。

事業名

横浜芸術文化・障害福祉 プラットフォーム形成事業

団体名

特定非営利活動法人 ST スポット横浜

所在地：神奈川県横浜市 URL：<https://stspot.jp/>

事業概要

文化施設へ足を運ぶことが難しい重度重複障害者等に対し、障害福祉サービス事業所に出向き、芸術文化体験（ワークショップ）を提供。また、障害福祉と芸術文化の知見を併せ持つ全国の専門人材にヒアリングを行い、それを横浜市内の地域文化拠点の職員と共有することで、障害者が文化施設等を活用しやすい方法に関する知見を深める。年度末の報告会ではその成果を周知し、報告書をウェブサイトで公開する。

文化施設等と障害福祉に関する知見を深め、 活動を促進するプラットフォームをつくる

実施内容

障害が重度でも、身近な場所で芸術文化に触れる機会を持てるように、交流を促進、障害理解を深める

重度障害者等との交流促進事業では、新型コロナウイルス感染症の影響でオンラインでダンスワークショップを実施しました。また、全国で障害者との芸術文化活動に取り組んでいる文化施設・団体に、オンラインでヒアリングを行いました。調査結果は横浜市 of 文化施設職員等と共有し、文化施設の役割について意見交換しました。

●文化施設職員等の重度障害者等との交流促進事業

開催日：2020年12月3日、9日、14日

対象施設：障害者支援施設リエゾン笠間

参加人数：計31人

アーティスト：入手杏奈（ダンサー・振付家）

アシスタント：涌田悠、斉藤稚紗冬

内容：1回目は施設職員のみを対象とし、2～3回目は主に重度重複障害のある成人。各回前半は講師によるパフォーマンスを映像で鑑賞し、後半は講師と会話をしながら同じように体を動かし、周囲の人と触れ合う。

●文化施設職員等の障害理解教育事業

1. ヒアリング調査

主に舞台芸術分野における障害者との取組みに関する先駆的な事例を収集し、障害者が文化施設等を活用しやすい方法を抽出した。

開催日：2021年2月17日～3月9日

対象：障害福祉と芸術文化の知見を併せ持つ全国の専門人材

2. 横浜市区民文化センター職員との意見交換

横浜市の地域文化拠点である区民文化センター職員等とヒアリング調査結果を共有し、意見交換をする機会を設けた。

開催日：2021年3月17日

参加人数：7名

場所：障害者スポーツ文化センターラポール上大岡

●発信交流事業

開催日：2021年3月17日

参加人数：7名

場所：障害者スポーツ文化センターラポール上大岡

内容：本事業の成果を周知する。また事業の成果は報告書にまとめ、ウェブサイトで公開した。



ヒアリング調査の内容を参加者と共有し、意見交換をした

事業の効果

障害者が身近な場所で芸術文化に触れるためのプラットフォームを創出

障害者などの劇場での芸術体験を促す取り組みが行われつつありますが、状況の共有やネットワークの創出までには至っていないといえます。また、成果は各現場にとどまり、向上に向けての議論なども不十分です。

障害者が身近な場所で芸術文化に触れる機会を創出するために、地域の文化施設や芸術文化団体と障害福祉についての知見を深め、活動を促進するためのプラットフォームをつくる必要があります。

障害福祉と文化芸術、双方の知見をもつ人材を育成する

重度障害者の場合、実施例が少なく、今回の交流促進事業は、全国の関係者に役立つモデルとなるでしょう。また、文化施設職員等の障害理解教育事業を通して、横浜市内のネットワークが形成され、全

国の専門人材の知見を得られます。発信交流事業では、未実施の組織による新たな取り組みへつながるでしょう。これらの事業で障害福祉と文化芸術の双方の知見をもつ人材育成が期待できます。

障害者スポーツ文化センター、行政の障害福祉課・文化振興課も参画

NPO単体や行政のみでは、取り組みの広がりに限界があります。障害者の芸術文化体験の普及には、芸術文化と障害福祉の両分野を横断するモデルづくりが課題となっています。横浜におけるプラットフォーム形成は、両分野の協働のあり方を模索する他の自治体でも取り組むことが可能なスキームであり、これをモデルとすることで波及効果も高くなります。

横浜市には、地域文化拠点、専門文化施設など、多様な公立文化施設があります。横浜市の状況は、各地の文化施設を取り巻く現状と似ており、横浜市での取り組みが全国の公立文化施設のモデルとなるでしょう。

当事業は、芸術文化の中間支援組織である認定NPO法人STスポット横浜と、オブザーバーで参画する障害者の芸術文化活動の拠点機能をもつ障害者スポーツ文化センター横浜ラポールが協働で運営することで、芸術文化と障害福祉のそれぞれの専門性を融合させることができ、障害者の実情を踏まえた芸術文化体験事業の提供が可能となりました。

また、横浜市障害福祉課および文化振興課もオブザーバーとして参画し、今後の事業展開の確実性も高まったといえます。



初回は職員のみで身体との関わり方を体感した



画面に映る講師と会話をしながら取組む（撮影：金子愛帆）

新型コロナウイルス感染症の影響

ヒアリングは、対象者と直接会えなくなり、オンラインで行いました。ワークショップは、講師が対面で行うことが難しいため、1回目に施設職員のみを対象としたワークショップを行い、2～3回目での参加者との触れ合い方法を探りました。施設側では講師の姿をスクリーンに映し、個々の参加者と会話をしながら一緒に身体を動かすなど工夫しました。

事業名

和太鼓で健康増進・社会包摂を実現する「エクサドン (EXADON)」プロジェクト

団体名

公益財団法人 鼓童文化財団

所在地：新潟県佐渡市 URL：<https://www.kodo.or.jp/>

事業概要

太鼓を使った「エクサドン」は、心身の健康に非常に有効であると同時に、太鼓や打楽器は、日本のみならず世界中に存在し、人間にとって根源的なもので、年代、性別、国籍、障がいの有無などの違いを超えて、多くの人々にアプローチできる手段である。高齢化が猛スピードで進み、老老介護が待っている日本の現状に向き合い、誰もが喜びや楽しさを享受できる機会を与えられるような社会を生み出すことを目指している。

高齢者や不登校の児童・生徒などが、身体的にも精神的にも元気になり、社会参加を促進することを目指す。また、その効果を検証する

実施内容

健康増進、介護予防フィットネス・プログラムのエクサドンで、人との交流を促進

「エクサドン」は、「エクササイズ（運動）」＋「佐渡」＋「ドン（太鼓の音）」を合わせた造語で、太鼓芸能集団を母体とする当財団と佐渡市で診療に携わる森本芳典医師によって開発された健康増進、介護予防フィットネス・プログラムです。

不登校生を含む児童・生徒、親子、高齢者を対象とするエクサドン教室と、エクサドンを推進するファシリテーターを養成する講座を実施しました。

●エクサドン教室

開催日：2020年7月7日～12月2日

回数：32回

会場：佐渡太鼓体験交流館ほか

対象：不登校をを含む児童・生徒、親子、高齢者

参加人数：847名

参加費の有無：あり

内容：不登校生含む児童・生徒、親子、高齢者に体を動かす習慣と仲間づくりの機会を提供し、社会参加を促す機会とする。

●ファシリテーター養成講座

開催日（期間）：2020年9月20日～12月22日

回数：5回

場所：オンライン

対象：一般

参加人数：26名

参加費の有無：なし

内容：エクサドンの推進役となる、ファシリテーターを養成



高校生を対象にしたエクサドン教室・実技



高齢者を対象にしたエクサドン教室

事業の効果

ユニバーサル・デザインの楽器である太鼓を使ったエクサドン教室が誕生

新潟県佐渡市は、太鼓芸能集団である「鼓童」の本拠地で、1981年の結成から日本全国また海外で活動するとともに、1988年から毎年夏に野外フェスティバル「アース・セレブレーション」を開催し、国内外のアーティストや参加者が佐渡市に集まるなど、住民にとって和太鼓は大変身近な存在となっています。また、森本医師は、精神科医・認知症サポート医で

あり、運動習慣、楽しい精神活動、社会的活動は、認知症だけでなく、さまざまな病気や障害の予防や精神的なサポートに有効で、伝統芸能にはこれらの要素が多くあると考え、佐渡の太鼓に着目しました。佐渡市では、2014年より、太鼓と芸能を楽しむ心と身体活動を中心とした健康増進、介護予防フィットネス・プログラムとして開始されました。

不登校生徒の外出のきっかけとなり、高齢者の身体活動と交流を促進

新型コロナウイルスの全国的な拡大の中、佐渡においては感染者の発生がなく、9月から徐々に島内の不登校生を含む児童・生徒を対象としたエクサドン教室を実施することができました。特に不登校生にとっては学校行事に参加するきっかけ作りになりました。

また、高齢者に対しても、9月より週に一度のペースで計12回のエクサドン教室を実施できました。毎回約20人が参加し、春先から新型コロナウイルス感染症の影響で人との接触が限られていた高齢者も、体を動かし、交流することができました。

ファシリテーター養成講座をオンラインで実施。海外からの参加者が半数以上を占めた

ファシリテーター養成講座は、もともとは合宿形式で、エクサドンを行いながら、ファシリテーターのさまざまな役割を学習してもらいます。しかし、今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、オンラインで開催しました。その結果、国内の遠隔地から参加を得られました。また、海外からの参加者が半数以上を占めました。これは、オンラ

インによる予想外の成果で、本事業が目的としていたエクサドンの世界への普及につながりました。このような取り組みは、障害者の芸術活動への参加プログラムの先進地であるアメリカでも、コロナ禍において積極的に導入されており、今後の事業実施において検討すべき手法であると考えています。



高齢者を対象としたエクサドン教室



オンラインでのファシリテーター養成講座

新型コロナウイルス感染症の影響

多数の参加者が一緒に太鼓をたたき事業を安全に実施することが難しく、当初予定していた内容を見直す必要が生じました。7月から本格的に実施する予定でしたが、佐渡島においては感染者の発生がないことから、9月に事業を開始しました。また、ファシリテーター養成講座は、オンラインでの実施に切り替えました。

事業名

熊川宿若狭美術館を拠点とする
芸術文化推進事業

団体名

特定非営利活動法人 若狭美&B ネット

所在地：福井県三方上中郡若狭町

事業概要

障害のあるアーティストの制作拠点「若狭ものづくり美学舎きらりアート部」における指導者の育成や、福井県障害者アート作品公募「きらりアート展」の作品の質向上を図る。またこれらの活動を集約する形で、同法人が運営する熊川宿若狭美術館において、障害者アート、子ども美術、現代美術を同時並列に展示し、障害者アートの独自の世界を発信し、美術の視点から真の共生社会の実現に取り組む。

障害者アートの制作支援と独自の世界の発信を通じ
真の共生社会の実現を目指す

実施内容

同時並列の展覧会開催と県内障害者アーティストを発掘したアーカイヴ資料集作成

熊川宿若狭美術館において「障害者アート」「現代美術」「子ども美術」の展覧会を同時並列で開催しました。浅野隆典展「養老線」では、故郷の鉄道路線である養老線の3両連結の電車を繰り返し描くことで、帰省するときの高ぶる気持を絵に表しました。絵の上にどっしりと座って、7ヶ月余りかけて大版厚手ケント紙1枚に、数色のマーカーで同じような構図をコツコツと描画して作成した作品をズラッと一挙に展示しました。

- 浅野隆典展「養老線」／真瀬宏子展／子どもの造形
- 開催日：令和2年5月14日～8月31日
- 場所：熊川宿若狭美術館
- 入場者：5,380名
- 入場料：無料

このほか、江戸雄飛展「増殖する書」／現代美術名品展／子どもの絵も開催しました。江戸雄飛展「増殖する書」は、テレビや新聞等で見聞きした語句を、思いつくと即、声に発し、連想する語句をつなげながら、猛スピードでそれらの文字を紙の上に書き重ねていく作品です。線が乱雑に重なる、解読不能な筆跡の固まりとなって作品が完成します。幅広の長い紙に書かれたそれらの作品は、見る人を圧倒しました。

- 江戸雄飛展「増殖する書」／現代美術名品展／子どもの絵
- 開催日：令和2年9月5日～10月26日
- 場所：熊川宿若狭美術館
- 入場者：7,232名
- 入場料：無料



浅野隆典展「養老線」 於：熊川宿若狭美術館



水谷太郎展 於：熊川宿若狭美術館

江戸雄飛展
チラシ

事業の効果

障害者アートの魅力を発信し、真の共生社会実現の一翼を担う

障害者アーティストの制作を支援し、障害者アート作品の独自性を広く発信し続けることで、真の共生社会実現の一翼を担うという活動内容が少しずつ周知されてきました。熊川宿若狭美術館における展示会では、障害者アート、現代美術、子ども美術を同時並列で展示したことによって、それぞれの美術を鑑賞する目的で来場した方々が自然と他の美術に触れることになり、美術の広がりを感じていただく

ことができました。

また、「もう一つの現代美術」として、障害者アートの独自性、面白さを肌で感じていただくこともできました。魅力を発信することで、障害者アート作品の存在価値が高まってきたと感じています。その証拠として、コレクションや展示のための作品レンタル希望者が徐々に現れてきました。

「若狭ものづくり美学舎きらりアート部」では多くのプロ作家を養成

このような中で、昨年度の田中铁也展、中西軍治展に続いて、今年度、企画されたのが「養老線」です。「養老線」と題して列車を描いた浅野隆典展、「増殖する書」と題した激しいドロ잉の大きな作品を展示した江戸雄飛展、幾何形体を構成した深みを感じる抽象画を展示した水谷太郎展は、多くの方々

から賛辞が寄せられ注目されました。「若狭ものづくり美学舎きらりアート部」の活動においても、その中で養成されたプロ級作家の個展が開催され、今後もより多くのプロ作家を育成していく励みになっています。

「もう一つの現代美術」として障害者アート作品の社会的認識を高めたい

また、これら美術館の展示活動の充実は、障害者アートの存在価値を高めるとともに、日本遺産・重要伝統的建造物群国指定の「熊川宿」に付加価値を与え、観光面でも貢献しています。今後も障害者アートの展示会を積極的に開催するとともに、ホームページ

の充実を図っていきます。こうした活動を通じて、独自性の高い障害者アーティストの作品の魅力を幅広く発信し、「もう一つの現代美術」として障害者アート作品の社会的認識をより高めていくことに努めます。



第 11 回福井県障がい者アート作品公募「きらりアート展」会場風景
於：パレオ若狭ギャラリー



江戸雄飛展「増殖する書」でのギャラリートーク 当館館長と横井悠氏
於：熊川宿若狭美術館

新型コロナウイルス感染症の影響

熊川宿若狭美術館が休館になり、浅野隆典展「養老線」も開会予定を変更せざるを得ませんでした。美術館の再開後は、展示場の消毒作業を1日3回実施するほか、殺菌灯を設置し、換気扇とあわせて室内の換気に努めています。また来場者には手の消毒や検温をお願いし、密を避けていただくためのお願い文書などを掲示しています。

事業名

CONFUSION INCLUSION

～芸術を冒険する～

団体名

特定非営利活動法人 ポパイ

所在地：愛知県名古屋市 URL：https://mo-ya-co.info/

事業概要

NPO 法人ポパイは、思いや技術、支援を分け合うことにより、住み慣れた街で障害者が主体的に暮らしていくことを目指す活動を展開している。今回の事業名である“CONFUSION”は混乱、“INCLUSION”は包摂（包み込むこと）を意味している。知的障害があったり、文化や言葉が異なる人達が共に踊ること——そこから生まれる混乱と包摂、そして、さらにその先にあるものを感じ取り、交換する試みです。

離れていて会えない仲間へ思いを馳せる ダンスの映像作品とオンライン交流会で絆を紡ぐ

実施内容

映像作品制作・オンラインダンスワークショップ・オンライントーク交流会

“CONFUSION は混乱、INCLUSION は包摂（包み込むこと）”を意味している。私達は知的障害がある、あるいは文化や言葉が異なる仲間達が、共に踊ることによって生み出される混乱と包摂を大切に活動してきました。ここで生まれた混乱と包摂、さらにその先に起こる“何か”を感じ取り、交換し続けることが私達の挑戦です。

私達のメンバーが参加するパフォーマンス集団「ウゴクカラダ」とオーストラリアの福祉団体「ルーセラ・サービス」は、これまでも映像・音楽・ダンスを融合させた舞台芸術作品を共同制作してきました。2016年度には名古屋で公演・ダンスワークショップを開催、2017・18年度にはオーストラリアで、2019年度には再び名古屋で公演・トーク交流会を実施しました。

そして今年度、制作したのは映像作品です。これまでの活動では「言葉が通じなくとも互いに思いやる気持ち」や「舞台上で共に成し遂げる喜び」を共有することができました。今回は離れていて会えない仲間へ思いを馳せて、メンバー1人1人がダンスで「自分の好きなもの」を表現しました。さらにその作品について語り合うオンライン交流会を開催しました。

●映像作品制作

- ・開催日（期間）：令和2年9月～令和3年1月
- ・場所：名古屋、オーストラリア ブリスベン近郊
- ・対象：ウゴクカラダ、オーストラリア キーストーン・クルー

●オンラインダンスワークショップ

- ・開催日（期間）：令和2年10月28日、令和3年2月3日
- ・場所：名古屋、オーストラリア ブリスベン近郊
- ・対象：ウゴクカラダ、オーストラリア キーストーン・クルー

●オンライントーク交流会

- ・開催日（期間）：令和3年2月6日
- ・場所：オンライン (zoom)
- ・対象：ウゴクカラダ、オーストラリア キーストーン・クルー、一般参加者
- ・参加人数：60名
- ・参加費の有無：無



映像作品撮影

事業の効果

既成概念に囚われないパフォーマンス集団 世界を舞台に活動を続ける

「ウゴクカラダ」は2013年11月に結成された、全身全霊のパフォーマンス集団です。『ウゴクカラダ』＝『動く体、動くからだ。』をモットーに、既成概念に囚われない、想像を超えた創造、カラダを動かしながらウゴク自分を愉しむための活動を展開しています。世界各地を活動エリアとする中で、「ルー

セラン・サービス」とは数年にわたって連携を続けてきました。これまでの連携では「言葉が通じなくとも互いに思いやる気持ち」や「舞台で共に成し遂げる喜びを感じ合っている様」など、多くの内的な成果を得ることができました。

新型コロナウイルスの影響で公演が中止 代わりに映像作品で内的な動きを表現する

新型コロナウイルスの影響により、当初予定していたオーストラリアのメンバーを招聘しての公演等ができなくなってしまいました。そこで、海外からメンバーを招いての公演に代えて、映像制作とオンライ

ンでのワークショップ、トーク交流会に内容を変更しました。映像制作にあたっては、映像制作者に振付作成の段階から来ていただき、障害のあるメンバーの様子や特徴を知っていただくように努めました。

オンライントーク交流会などリモートで障害者の芸術活動を促進

パフォーマンスの映像制作に加えて、コミュニティダンスのワークショップや映像作品鑑賞&トーク交流会などをリモートで開催しました。対面での交流がかなわなくても、オンラインの交流を通じて、障

害者によるダンス・福祉事業者での表現活動・作品の制作過程などについて語り合い、障害者による芸術活動の促進を図ることが期待できます。

会えないからこそ通じるものもある ダンスを通じて心に響く芸術を

リモートでの芸術活動および交流会を通じて感じたのは、離れていて会えないからこそ通じ合えるものもあるということです。メンバー1人1人がダンスで表現し映像作品にすることで、人々の心に響く芸術を作ることができると確信しています。またオー

ストラリアのスタッフとのミーティングをzoomで行う際には、日英通訳さんに入っていたりなど、できるだけスムーズにミーティングできるように工夫しました。



オンライントーク交流会

◀オンライントーク交流会
アーカイブ◀映像作品
CONFUSION INCLUSION
~ For You ~

新型コロナウイルス感染症の影響 zoom ミーティング、オンラインでワークショップとトーク交流会を行った。

事業名

障害のある児童や成人の身体的芸術活動 (ブレイクダンス)の創造と発表の機会を 確保・充実させる取り組み

団体名

日本アダプテッドブレیکن協会

所在地：大阪府大阪市 URL：https://yozigenz.com/jaba

事業概要

「ダンスで人を幸せにできる」という信念のもとに日本における障害児、障害者のダンス全般やアダプテッドスポーツ、アート活動の普及促進を目的に活動している。本事業のコンセプトは「心身や表現の多様性を認め、オリジナリティの高さを讃える」である。障害を持つ成人・児童にブレイクダンスの風土を伝え、障害者だけで行うブレイクダンスコンテスト「アートファンクブレیکن」や、障害者と健常者が共に出場するダンスコンテスト「アートファンク大阪」を実施した。

日本で初めて障害者が中心のブレイクダンスコンテストを企画 ——全国から高い関心を集める

実施内容

障害の有無にかかわらず全員が盛り上がるダンスコンテストを実施

●アートファンクブレیکن

健常者に混じるのではなく障害者が中心となったダンスコンテストを開催しました。2人ペアで行うダンスバトル「障害者ブレイク 2 on 2バトル」と1人で出場するダンスバトル「障害者ブレイク ソロバトル」を開催しました。障害のある人だけが参加できるダンスのブレイクバトルで、こうした試みは全国でも初めてと思われます。MCには キイチ氏、DJは SENSE (明石ブレイカーズ/HotPoint) 氏を招き、5人の審査員による審査が行われました。

開催日：2020年11月3日

場所：大阪市長居障害者スポーツセンター

対象：心身に障害を持つ人

参加人数：69人 (YouTube 配信+アーカイブ
1129回)

参加費の有無：無し

●アートファンク大阪

健常者・障害者・その組合せの自由な参加形式かつオールジャンルのダンスで行う、ショーケースダンスコンテストを行いました。障害者同士がタッグを組む「障害者2 on 2」と誰もが出場可能な「一般2 on 2」、座っている状態での上半身のみを使ってのソロバトル「シットイングバトル」を行い、障害の有無にかかわらず全員が盛り上がるダンスバトルを目指しました。

開催日：2020年9月13日

場所：グラフィホール (大阪市住之江区)

対象：障害/健常の垣根を無くしたすべての人

参加人数：176人

参加費の有無：無し



アートファンクブレیکن (於：大阪市長居障がい者スポーツセンター)



アートファンク大阪 (於：グラフィホール (大阪市住之江区))

事業の効果

全国のメディアで情報発信、大阪モデルが全国に拡大も

アートファンクブレイキンでは、障害者が主役となった本事業を新聞（全国紙）や雑誌など主要メディアが多く取り上げ、社会に訴求できたことは大きな成果です。他にYouTubeによるオンライン配信も行い、審査員演技とアーカイブを含め1129回の視聴がありました。大阪まで来ることができない地方在住者や移動困難な障害者にもアクセスが可能だった点を含めて大成功でした。これら広範囲な情報発

信により、大阪モデルの障害者イベントが、大阪市から大阪府・西日本と広い地域に波及し、複数の地域で同様のイベントが開催されることになりました。今後、全国大会開催も予定されています。付随する効果として、地域福祉課題を解決するプロジェクトや団体がそれぞれの地域でも立ち上がったことは特筆すべきアウトカムといえます。

医療・リハビリテーション・行政などの学会で発表

障害者スポーツセンターでダンスイベントのリアル開催とオンライン配信を行い、その成果を医療・リハビリテーション・行政関係者が参加する学会で発表できたことは有効でした。事業の進行過程において、医療・福祉・教育の関係者に文化庁の本事業と

団体の存在を知ってもらい、賛同を得られた成果は大きいと考えています。実際に新聞雑誌の取材と掲載、また学会発表の後に大阪府から開催の誘致を受けたり、協賛企業からの声かけで関東への足掛かりも得られました。

障害者ダンスをエンターテインメント化

アートファンク大阪では障害者ダンスをエンターテインメント化することによって、ユニバーサル社会実現のために必要な、障害者と健常者をつなぐ間口を広げることができました。障害者と健常者をつなぐ間口は広範囲におよび、また官民・医療・福祉・スポーツなど多方面への発信を行うことができました。新

型コロナウイルスの感染拡大の影響で前年に使用した会場が使えず、急遽、感染防止に適した吹き抜け構造の会場に変更しました。人数制限もあり会場はほぼいっぱいでしたが、他施設では開催不可だったことを考えると、感染防止の工夫がイベントの成功につながったと感じています。



アートファンク大阪（於：グラフィホール（大阪市住之江区））

新型コロナウイルス感染症の影響

アートファンクブレイキン、アートファンク大阪のいずれも感染防止のために入場制限を設けなければなりません。また、身体接触が避けられない児童対象のイベントはキャンセル、障害のある女性のワークショップはオンライン配信による講演会へ変更しました。手指消毒や検温などの基本的な対策に加え、入場退場エリアをそれぞれ1箇所限定。靴裏（車椅子はタイヤ）のアルコール消毒エリアを設けました。またホール3ヶ所の外気口に換気用工場扇を3つ設置、使い捨て床マットの敷設なども行いました。

事業名

舞台芸術鑑賞サービス ショーケース&フォーラム

団体名

一般社団法人 日本障害者舞台芸術協働機構

所在地：大阪府大阪市 URL：https://jdp-arts.org

事業概要

演劇短編作品「駈落ちアニバーサリー」（作品提供：MONO）の上演ならびにフォーラム（基調講演とトークディスカッション）に合計4種類の字幕を付け、字幕システムを体験した。また、弱視者の協力を得て、ライブ映像による観劇のモニタリングを実施した。終演後には、字幕を導入するためのサポートとしてフォローアップ研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大防止の対策として、動画配信を実施した。

各種の字幕体験を通して、舞台芸術に関わる関係者に 鑑賞サービスの知識共有と技術移転を図る

実施内容

タブレットに「アニメーション字幕」などを表示。動画配信も字幕付きで、まずは鑑賞者としての体験を提供

第1部では、「駈落ちアニバーサリー」を3つのシーンに分けて上演。それぞれのシーンに「かんたん日本語字幕」「アニメーション字幕」「多言語字幕」をタブレットに表示し、鑑賞者の立場で各字幕を体験できるようにしました。第2部のトークディスカッションでは、鑑賞サービスの価値や必要性、在り方、可能性について、さまざまな立場の登壇者から活発な意見が出されました。その後、希望者には、技術移転を目的に研修を実施。第1部での字幕システムの詳細を説明しました。

●舞台芸術鑑賞サービス

ショーケース&フォーラム 2020

開催日：2020年10月1日

会場：アイホール 伊丹市立演劇ホール

内容：【第1部】ショーケース MONO 演劇
「駈落ちアニバーサリー」上演

【第2部】フォーラム

- ①基調講演「テレビの字幕から学ぶ～字幕サービスの価値～」松隈天（株式会社NHKグローバルメディアサービス）
- ②トークディスカッション「理念・想像から実践・行動へ」パネリスト／土田英生（MONO代表、俳優）、平井徹（KAAT 神奈川芸術劇場）コーディネーター／大澤寅雄（株式会社ニッセイ基礎研究所）

【フォローアップ研修】字幕システムの詳細を説明

【動画配信】ショーケース（字幕付き）&フォーラムの動画を有料で配信（10月7日～14日）



事業の効果

関西中心の直接参加と、開催地以外の地域からの動画視聴 目標人数以上の舞台芸術関係者へ発信できた

会場参加 76 人のうち、60%以上が大阪からの参加者で、80%以上が大阪・兵庫・京都・滋賀・和歌山の関西地域からの参加者でした。このように関西地域を中心に鑑賞サービスの知識共有と技術移転を図ることができました。逆に、動画配信では、関西地域の参加率（視聴者率）

が低く、関東・山陰・中国・九州からの視聴が多くなりました。新型コロナウイルス感染症対策としての動画配信が、開催地域以外への知識共有につながったといえます。会場と動画配信を合わせ、目標人数を上回りました。

劇場・施設の管理運営、事業企画、舞台技術、実演、 字幕サービス提供などさまざまな役割を担う人々の理解を深めた

参加者は、劇場・施設の管理運営者のほか、事業企画者（プロデューサー）や制作者、舞台技術者、俳優やダンサーといった実演者、字幕サービスを提供する企業・団体、CSR 活動に取り組んでいる民間企業、障害のある当事者などでした。また、トークディスカッションの登壇者も、演出家・俳優、舞台技術

者（舞台監督、プロダクションマネージャー）と、異なる専門性をもっています。このように舞台芸術に関わるさまざまな職能をもつ人が参加し、そのすべての人に「誰もが参加できる環境づくり」の役割と責任があることを共有することができました。

鑑賞サービスへの問い合わせがあった一方、感染症の影響か、モニター応募は少数だった

実施後、複数の劇場や実施団体から問い合わせがありました。実践をサポートする目的で募集した「タブレット型多言語字幕サービスモニター」への申し込みは、新型コロナウイルス感染症の影響のためか、2 件にとどまりました。

なお、2019 年度から継続的に周知したことで、当団体のサービスを利用または利用する予定の劇場・団体は確実に増加しています。2020 年度の実施ならびに実施予定の劇場・団体は、全国公立文化施設協会（東京）など 7 件となっています。



新型コロナウイルス感染症の影響

会場の収容率を 50%に制限し、客席は前後左右を空けて間隔をとりました。当日キャンセル・返金可能の体制を構築。都道府県をまたいでの移動を控える動きがあり、参加を見送る人がいました。受付での接触を減らすため、参加料はできる限り事前振込をお願いし、パンフレットは手渡しではなく、ビニール袋に入れて参加者が取る形にしました。トークディスカッションのコーディネーターが海外から帰国したばかりで、14 日間の待機が必要となり、オンライン参加になりました。消毒や検温体制、動画配信など、当初予定していなかった経費が必要になり、オンライン参加になった登壇者の旅費・交通費や企業協力などによって補いました。

事業名

日本センチュリー交響楽団 特別支援学校コンサート

団体名

公益財団法人 日本センチュリー交響楽団

所在地：大阪府豊中市 <https://www.century-orchestra.jp/>

事業概要

本事業は自主事業として10年以上継続して実施しており、これまでに延べ11,000人以上の児童生徒や教員が参加してきた。完全バリアフリーの会場を使用したオーケストラコンサートである。知的障害や肢体不自由の児童生徒だけでなく、視覚支援学校や聴覚支援学校など、様々な障害を持つ児童生徒の参加が可能。また、学校から移動することが難しい児童生徒に向けて、学校訪問型のアウトリーチ室内楽コンサートを行っている。

知的障害や肢体不自由、視覚・聴覚に障害があっても 音楽を楽しむ

実施内容

完全バリアフリーの会場を使用したオーケストラコンサートと学校訪問型の室内楽コンサートを実施

●学校訪問型アウトリーチ室内楽コンサート

開催日（期間）：2020年10月28日（水）

場所：大阪府立平野支援学校

対象：大阪府下の支援学校の児童生徒・教員

参加人数：高等部1～3年生25人、教員25人
計50人

参加費の有無：無料（事前申し込み制、5校まで）

実施内容：例年であれば、大阪府内の特別支援学校5校に訪問して室内楽コンサートを実施するが、今年は新型コロナウイルス感染症の影響によって1校のみで実施。クラシック作品からポップス曲まで様々なジャンルの音楽をお届けしました。普段は近くで見ることができない楽器を注意深く観察する生徒さんの姿はとても印象的でした。

●オーケストラコンサート

開催日（期間）：2021年2月2日（火）

場所：国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）

対象：大阪府下の支援学校の児童生徒・教員

参加人数：600人を予定（2021年1月現在）

参加費の有無：無料（事前申し込み制）

実施内容：完全バリアフリーの会場を使用した、オーケストラ公演です。楽器紹介ではオーケストラを構成する楽器をそれぞれ紹介し、楽器個別の音色を聴いていただきました。また、指揮者体験コーナーなどの参加型のコーナーを取り入れ、会場全体でコンサートを作り上げることを体感していただきました。



ピアノ三重奏



オーケストラ公演

事業の効果

コンサートホールへ出かけることが難しい子どもにも音楽を届けたい

コンサートホールへ出かけることが難しい子どもたちにも音楽を届けたいという思いで、毎年継続的に行っている事業です。室内楽コンサートは、楽団が学校に出向いて開催するため、日頃生活している環境で安心して演奏会を楽しんでいただけます。曲目には参加型プログラム(リズム演奏、楽器体験)やアカデミック

な内容(楽器紹介、教科書に掲載されている曲の紹介等)を組み込むことによって、音楽の実技・鑑賞の授業として扱っていただくこともできています。また、学校行事の一環としてプロの演奏を聴くことによって、特別支援学校と音楽・芸術文化、実演団体との距離を縮めるきっかけにもなると考えています。

音楽が持つ力によって生きる力を育成する

オーケストラコンサートは、毎年、1000人以上に鑑賞機会を提供することを目標としていましたが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、例年の半数程度の600人に参加していただく予定です。障害の有無に関わらず、楽しく参加できる演目を組み入れたコンサート体験を提供しています。こ

の体験を通じて、オーケストラがより身近なものになると同時に、障害のある人たちの社会参加のさらなる促進が期待できます。また、音楽が持つ力、オーケストラのサウンドが持つ力によって、特別支援学校の児童・生徒の感性や生きる力の育成にも寄与できると考えています。

「楽しい時間を過ごした」という記憶に残るコンサートを

これまで特別支援学校の児童生徒・教員からは参加料を徴収せず社会貢献事業として行ってきました。今後もその形態で事業を維持継続していくことを目標としています。また、この事業は、当楽団が大阪府文化振興財団のオーケストラとして活動していた頃から継続していて、参加している特別支援学校は年に1回の恒例行事として捉えていただいています。

▽オーケストラを聴いてみたいけれど、どうしたらよいか分からないという状況を作らない
 ▽オーケストラそのものの存在を知ってもらう
 ▽「楽しい時間を過ごした」という記憶に残るコンサートであること
 ——を目的とし、共生社会実現のための活動の一環として、これからも継続していきたいと考えています。



オーケストラ公演



オーケストラ公演(指揮者体験)



児童生徒から送られてきた感想文(一部)

新型コロナウイルス感染症の影響

学校関係者以外の立ち入りが禁止となり、学校訪問型というメリットが十分に生かせませんでした。また、学年ごとの大人数での参加が難しく、延期を希望する学校も多かったものの、双方のスケジュールの目途が立たずに日程が確保できませんでした。唯一、実施できた学校も、プログラム内容(歌唱、楽器体験、共演等)を縮小せざるを得ませんでした。これに対する対応としては、入校時の検温・手指消毒の実施・マスク着用の徹底(入退場、演奏中、MC中すべて)を行い、演奏者同士の間隔を空けたセッティングを行いました。(室内楽コンサート)

事業名

障害者の舞台芸術支援と支援人材の育成に関するプラットフォーム

Open Arts Network Project (オープンアーツネットワークプロジェクト)

団体名

社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会

所在地：大阪府堺市 URL：https://www.big-i.jp/

事業概要

障害者の芸術文化事業に携わる専門家、団体、障害当事者などが横断的なネットワークを形成し、多様な障害種別に応じた芸術文化に関する活動支援や相談支援、情報の受発信、人材育成につながる事業を実施。また、本事業を地域の劇場・音楽堂等と協働、障害者をはじめとする多様な人が参加できる事業づくりの拡充と一過性に終わらない事業展開をめざしたことで、障害者の芸術文化活動、参加への支援基盤の形成につなげる

多様な人々が芸術文化に参加できる事業づくりとその環境整備の促進をめざす

実施内容

芸術と福祉、各分野の関係者が出会う場を設け、障害者の芸術活動・参加支援を考え、実践につなげる

福祉と舞台芸術、双方の関係者が、障害者の舞台芸術の活動・参加のための連携や協働のあり方を考えるための研修、視覚障害者の音声ガイドスタッフの育成や育成マニュアルの作成、全国の劇場アクセシビリティの共有サイトの更新などを行いました。

●福祉と芸術をつなぐラウンドミーティング

開催日：2020年9月29日

会場：島根県民会館

内容：講義「障害のある人の芸術活動を取り巻く法制度とその展望」 ワークショップ「こんな時、あなたならどうする？ 実際にあった事例から」「身体ワークショップ・グループワーク」「芸術と福祉の現場がつながると、何ができる？」

講師：長津結一郎、大井卓也、鈴木京子 ほか

●音声ガイドスタッフ育成講座

開催期間：2020年10月14日～2021年1月13日

会場：としま区民センター

コース：A「音声ガイドって何？」

B「台本づくりとモニターチェック（実践）」

C「何をガイドすべきか？」

D「ナレーション講座」 ほか

講師：伊勢真一、平塚千穂子、澤佳一、田中正子、鳥居秀和、小島ゆみこ ほか

●オープンアーツネットワーク ポータルサイト (HP) の更新 (調査含む) とサイト運営

調査対象施設等：2230件

期間：2020年6月1日～2021年3月31日



事業の効果

芸術と福祉双方の視点と専門性が必要 分野を超えたネットワークが、芸術文化の扉をひらく

障害のある人の舞台芸術活動、参加の支援には、芸術と福祉双方の視点と専門性が必要となります。芸術と福祉双方の専門性をもつ人は少なく、また、その人材を育成するには、実践経験や専門性を学ぶ機会が必要です。「福祉と芸術をつなぐラウンドミーティング」では、地域の劇場・音楽堂等の芸術団体と福祉団体（福祉関係者）が出会う場となり、ともに障害者の舞台芸術活動、参加支援を考えることができました。

また、劇場のスタッフが障害者へのサポートで「知らなかった」「分からなかった」事例や、福祉団体の人が障害のある人が求める芸術活動への参加の方法について悩んでいることをディスカッションすると、双方の専門性をつなげれば解決できることが多いことを知る機会になりました。

地域における芸術と福祉のネットワークが形成されることによって、障害のある人の舞台芸術活動、参加の推進を拡充していけるといえます。

「音声ガイド付き」は少ないのが現状。

劇場・公共文化施設の事業計画に、鑑賞サポートを盛り込むきっかけとなった

近年、障害のある人の芸術文化活動、参加への支援が推進されるなか、鑑賞サポートや取り組みへのニーズが高まっています。音声ガイド付きの上映作品は、増えてはいるものの、年間の公開作品数が1000を超えるにもかかわらず、まだ少ないのが現状です。また、劇場で行われる演劇やミュージカルなど、LIVEでの音声ガイドを実施しているのもわずかです。映画、劇場公演での音声ガイドを促進するには、視覚障害の特性やニーズを理解し、音声ガイド台本作成のノウハウを有することや、ナレーターの人材育成が必要となります。

「音声ガイドスタッフ育成講座」には、視覚障害の理解から台本づくり、ナレーション、バリアフリー上映会づくりまで、実践で活かせる内容を盛り込み、上映会では、受講生が実際に音声ガイドのナレーターとして参加しました。劇場や公共文化施設従事者の受講も多く、自施設の今後の事業計画に、情報保障をはじめ鑑賞サポート付きの事業を盛り込むことを具体的に考えるきっかけになったようです。また、音声ガイドナレーターとして、活動団体への参加を希望する参加者もいました。



新型コロナウイルス感染症の影響

日々、状況が変化し、実施の可否の判断や運営面など変更が多く、判断、変更の対応に時間を要し、事業スタートのタイミング決定が困難でした。2020年4月の緊急事態宣言後に、費用に大きく影響しないものでできる準備だけを進め、解除後の国や自治体の動きに併せて、短い制作期間で事業を進め、オンラインで、また参加人数の上限を下げた実施しました。定員の倍以上の施設を借用、必要な消耗品等を購入、派遣、アルバイトなどの人員の増員など、当初見込んでいなかった費用が必要になり、予算の見直し、事業ごとの予算振替えを行いました。

事業名

日本・アジアの障害のある人の 舞台芸術作品と先進的な鑑賞支援に 関する海外発信

団体名

社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会

所在地：大阪府堺市 URL：https://www.big-i.jp/

事業概要

(1) 障害のある優れたアーティストと舞台芸術作品の海外発信と舞台芸術活動を通じた国際交流 (2) 海外に向けた鑑賞支援のデモンストレーション——の2つの活動を行いました。新型コロナウイルス感染症の影響を受けつつも、障害者の舞台芸術を通じた国際交流、ネットワーク構築と強化を目指し、オンラインによる映像作品の配信を行いました。また、日本と海外とを結び、障害者の芸術活動支援団体や芸術団体によるシンポジウムを開催しました。
事業 URL：https://openartsnetwork.jp/

日本とアジア4カ国を結ぶ国際ネットワークを構築

実施内容

障害のある優れたアーティストや舞台芸術作品を海外に発信

日本博主催共催型事業で、アジア各国と共同制作した舞台芸術創造事業において成果や課題を共有。障害のある人の芸術活動における国際ネットワーク形成や日本の障害のあるアーティスト、鑑賞支援技術の発信を目的に以下の事業を行いました。

●シンポジウム 共通感覚を拡げて with 香港 (日本博事業と連携)

開催日：ライブ配信／2021年3月13日、後日配信
／同19～26日

場所：東京・香港・台湾・マレーシア・シンガポール
各地よりオンライン参加

対象：劇場・音楽堂等、芸術、文化事業団体、福祉施設（事業所）、福祉団体、自治体、NPO など
市民活動団体、個人ほか

視聴数 国内：195回 海外：218回（12か国）

① 鑑賞支援デモンストレーション／ オンラインによる発信

多言語リアルタイム字幕／日・英（視聴者には日英、話者に日本語・英語・中国語の3言語による同時通訳で進行）

② 障害者による舞台芸術作品の紹介

- ・「Breakthrough Journey」（日本博事業で制作したダンス作品）公演のダイジェスト映像を上映
- ・日本、香港の障害者によるダンス小作品の映像を上映

③ トークセッション

『協働、創造、共感と新たな創造』

第1部では、日本、アジア4カ国による障害のある人の舞台芸術作品の創造活動において、各団体が目指したことや課題についてディスカッションしました。第2部では、障害のあるアーティストとともに創作する現場への支援や、作品を創作する上での工夫などについて、日本と香港でディスカッションを行いました。



開催チラシ

事業の効果

芸術文化活動を通じた国際ネットワークの構築

障害のある人の舞台芸術活動における環境整備や支援方法などについて、それぞれの国・地域における成果と課題を共有し、課題解決に向けたノウハウを得る機会となりました。参加した国（地域）においては、行政をはじめ社会全体において、障害者の芸術活動への理解や支援、環境整備が不足している国もあり、支援のノウハウも充分ではありません。シン

ポジウムをきっかけに、日本における障害者の舞台芸術活動への支援ノウハウを提供することができました。また、参加国の中で先進的に行っている国や地域の活動・支援方法を共有し、今後も参加国間での協力、協働につながるネットワークの基盤を創出できました。

優れたアーティストや芸術作品を発信し、活動の場を創出

これまで障害のある人の芸術活動の海外発信は美術分野が中心でしたが、国内の障害のある優れたアーティストや舞台芸術作品を周知することができました。優れたアーティスト、芸術作品を海外に発信で

きたことによって、国内での障害者による舞台芸術活動への評価を高めるとともに、国際的な活動の場の創出につなげていく機会となりました。

日本における鑑賞支援技術を周知

また、障害の有無に関係なく、鑑賞できる環境づくりにおいて、日本での鑑賞支援技術は先進的であるにもかかわらず国際的な認知度は低いのが現状です。今回のシンポジウムでは、多言語（日英）によるリアルタイム字幕の鑑賞支援モデルとして日本の取り

組みを発信することができました。フリートークで話す登壇者は日・英・中の3言語を日・英字幕で提供し、障害者の舞台芸術活動への支援が充分ではない国に向け発信でき、障害者の舞台芸術活動参加への理解や啓発の機会にもなりました。



第1部・第2部登壇者

新型コロナウイルス感染症の影響

計画当初は香港での開催でした。日本、香港、双方での国や地域からの要請が違っていることもあり、調整に時間を要しました。また、多言語によるシンポジウムをオンラインで開催（ライブ・後日配信）することになりました。その結果技術面での対応やパンデミックが収まらないことで、予算についても見直しが必要になりました。対応としては、緊急事態宣言の発令や解除など国・自治体の動きに合わせて、費用への影響が少ないものから準備を進め、短期間で制作を進めました。さらに、日本と香港における感染拡大状況や政府からの情報などを常に収集し、香港の協力団体とのミーティングを頻繁に行い、代替案を検討するほか、運営面での変更内容を共有し進めていきました。

事業名

こんにちは、共生社会 (ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ)

団体名

特定非営利活動法人 ダンスボックス

所在地：兵庫県神戸市 URL：URL：https://db-dancebox.org/

事業概要

本事業では、「社会包摂 / 社会における社会的弱者に対する理解促進」「複合的な理解・知見をもつ人材の養成」「鑑賞・参加機会の拡充」「創造体験の機会・創造活動の場の充実」「情報保障の充実」を目指し、「作品創作、作品上演、アフタートーク」「プログラムの可視化としてオンラインフェスティバル」を実施。フェスティバルの名称の「MISCH MASCH」は「ぐちゃぐちゃである」という意味である。

関わる人すべてが新たな視点や価値観を見出し、 社会的弱者への理解を深め、真の共生とは何かを考える

実施内容

「おどる」「みる」「きく」「つながる」「しる」をテーマに情報保障を充実させたアートプログラム

「MISCH MASCH Festival」では、ダンスや文化芸術のもつ力を通して、多様な人が共生する社会に向けて新たなビジョンを切り拓くアートプログラムをオンライン配信します。テーマは「おどる」「みる」「きく」「つながる」「しる」で、手話通訳、英語通訳、字幕表記、副音声を（できる限り）つけて番組を編成しました。

また、ダンスの始まりに決まった形はありません。「やさしいコンテンポラリーダンスクラス」では、音楽を聞いて踊ったり、道具を使ってみたり、時にはゲストに音楽家を迎え、いろいろな音に耳とからだをすまして、それぞれのペースで自分の腑に落ちるダンス、集まったメンバーでのダンスを楽しみ合いました。

● MISCH MASCH Festival

開催日：2021年2月7～21日

会場：オンライン（収録は、ArtTheater dB KOBE、新長田界限）

- 内容：①ドイツのケルンを拠点に世界中で活動を広げる、身体障がい者と健常者によるダンスカンパニー「DIN A13」の活動と、育成プログラムの紹介。【しる、つながる】
- ②耳からダンス、やさしいダンスクラス、エレナ（フィリピン）の家族でダンスワークショップ【おどる、つながる】
- ③視覚障がい者・身体障がい者のソロダンス【みる】
- ④サイレントダンスシアター【みる、おどる、

つながる】

- ⑤副音声つき「視るダンス」【みる】
- ⑥多国籍まち・新長田の旧正月巡りツアー、舞台作品『パミリヤ』をめぐるトーク【みる、しる】
- ⑦まちを MISCH MASCH【みる、つながる】 オープニングプログラム～新長田のおっちゃん合唱団「ビッグ腹ダイス」の歌とトーク。クロージングプログラム～新長田アートマフィア・ダンス部新作上演とトーク ほか

●やさしいコンテンポラリーダンスクラス

開催日：2020年10月4日～2021年3月14日
(定期的に開催)

場所：ArtTheater dB KOBE、オンライン

対象：ダンスを踊ってみたい人なら誰でも（発達障がい、知的障がい、認知症などのある人、日本語を話さない人、ベビーカーなど子ども連れ、子どもから高齢者）

定員：15名（単発参加も可）



事業の効果

劇場は安心して行ける場所。舞台芸術体験への第一歩を豊かに踏み出すために

新型コロナウイルスの影響で、今年度は、大人数での事業を実施できなかった分、一人ひとりの表現したい気持ちの醸成と、それを丁寧に受け止める場所・機会の入り口をいくつか設けることができました。特に、今年度は障がいのある人やその家族、日本で働く外国人、認知症の人や、踊ったことのない人など、どんな人でも参加可能なダンスクラスを定期的に劇場空間で開講。参加者それぞれが自分のための時間としてダンスを楽しみ、劇場が安心して来られる場

所、行ってもよい場所として定着し始めています。また、今年度は事業の中止や変更が相次ぎ、実施した事業が見えにくくなったこともあり、今年度事業の総集編としてオンラインでフェスティバルを実施。初の試みでしたが、移動が困難な人や遠隔地の人などにも、オンラインでプログラムを届けられました。視覚障がいや聴覚障がいがある人にも、手話や筆談、副音声なども取り入れることで、芸術体験を身近なものと感じられるものになりました。

障がいのある人や国籍の違う人が主体的にかかわる仕組みづくり

障がいのある人や、国籍の違う人、違いを持った多様な人たちが日常的に出入りする劇場を目指し、今年度は、参加者がより主体的に関わる仕組みをつくることから始めました。そのようなプログラムとして、例えば「サイレントシアター」が、あります。参加者のうち、手話ができる聴覚障がい者の割合は2割以下で、手話や発話を用いず劇場を楽しむプログラムです。2時間一言も発しないで行進・ディスカッションを行った「サイレントシアターこと始め」など、チームで取り組みました。

また、身体障がい者を含むダンスアーティストの育成プログラム、視覚障がい者が参加する際の環境づくり、国籍の違う人たちが加わる（Mixedの）現場づくりなど、企画段階から当事者とともに考える基盤が確立できました。

さまざまな実践や研究、クリエイションなどを通じて、これに関わるすべての人にとって、学びや分かち合える喜びは大きく、情報交換・経験も共有し、事業を運営する人材、現場をサポートする人材、そしてアーティストが育っています。



新型コロナウイルス感染症の影響

予定していた事業のすべてで、プログラムの中止や、時期、定員、演出などの変更、会議及びプログラムでのオンライン導入を行いました。聴覚障がい者を交えたプログラムでは、事業ミーティングもオンラインでは難しく、環境を整える（音声認識アプリを活用）などの事前準備などに時間を多く費やしました。

事業名

NEW TRADITIONAL : 障害のある人の表現と伝統工芸の相互発展

団体名

一般財団法人 たんぽぽの家

所在地：奈良県奈良市 <https://tanpoponoye.org/>

事業概要

福祉×伝統工芸の可能性に着目し、新しいものづくりのあり方や伝統工芸の可能性を模索している。障害のある人の表現と伝統的なものづくりを組み合わせた実例（製品）づくり、福祉施設とデザイナーの協働によるものづくりを紹介する展覧会、デザイナーや研究者、ギャラリーオーナー、ものづくりのコーディネーターにかかわる人などによる交流の場づくりを実施。ものをつくる人、使う人、伝える人が交流し、ものを通して新しい生活文化を提案する足掛かりをつくることを目指した。

事業 URL : <https://newtraditional.jp/>

福祉×伝統工芸が生み出す新たな可能性を模索

実施内容

福祉施設のものづくり技術と伝統工芸をつなぎ、オンラインショップなどでの販売を展開

●実例づくり

開催日：2020年5月21日～

福祉施設で取り組まれているものづくりの技術と伝統工芸の技を組み合わせることにより、作品や製品をつくりその一部を販売しました。2020年度は奈良の春日大社境内の杉を用いた燭台、山形の米沢緞通・滝沢工房との協働による緞通「NEW DANTSU」を製作。また、希少な蚕の品種である「小石丸」を育て、シルクを用いた商品化の検討にも取り組みました。それぞれの製作過程に障害のある人も携わり、技術を学びました。

●事例を紹介する展覧会等の開催

展覧会名：滑らかな粘土の床が、丘陵に広がる舞台の上で—NEW TRADITIONAL 展 in 常滑

開催日：2021年1月22～31日

場所：INAX ライブミュージアム 土・どろんこ館

参加人数：840名

焼き物の産地である常滑市で「素材としての土」に注目し、デザイナーと福祉施設の協働によって生まれた作品や製品、製陶業に関わるつくり手との実践のプロセス・成果を展示しました。会期中には、屋外での「土器焼き」を実施し、土から土器へと変化していく工程を見せたほか、展示に関わったスタッフや陶芸家によるトークセッションを開き、福祉とものづくりのこれからの関係性について議論を深めました。

●有識者への聞き取りおよびハンドブックの発行

左記の取り組みに加えて、デザイナーや研究者、ギャラリーオーナーなどの有識者への聞き取りを実施しました。また、取り組みをまとめた小冊子を作成し、全国の障害者福祉施設、各都道府県の障害福祉課・文化振興課、アート・ものづくり関係者、芸術大学・美術大学、美術館・博物館などに配布しました。



「滑らかな粘土の床が、丘陵に広がる舞台の上で—NEW TRADITIONAL 展 in 常滑」展示風景

事業の効果

ひとつものの関わりで生まれる、地域の再発見

同じ地域で素材から製品化、発信までおこなうことで、限定された地域を舞台に、ものとおしてその地域の伝統産業や文化をあらためて見直す機会となりました。愛知県常滑市での陶土を使った取り組みでは、近隣でもつながることのなかった、窯業に携わる企業、陶芸家、福祉施設、ミュージアムがつながり、ひとつのプロジェクトを実施することができ

ました。その結果、この出会いが新しい商品開発につながったり、障害のある人の地域との関わりが豊かになりました。この方法はいわゆる日本各地のさまざまな伝統産業・地場産業の産地を舞台に実施することが可能だと思われる反面、狭い範囲での事例をどれだけ広範囲に伝えるかが今後の課題です。

ものの循環や持続可能性を、素材から考える

多様な事例製作に取り組んだなかでも、春日大社の杉で作るプロダクトには、奈良県の歴史的な文化遺産と、日頃は素材として使うことの難しい古損木の再生という二つの意味合いがありました。素材の由来や工法などの物語からものの価値をつくっていくことや、そこから「ものを愛でる、大切につかう」

ことの提案ができました。この事例にかぎらず、障害のある人のものづくりにおいて、再生可能な素材や環境に配慮した製法など、地域の歴史や伝統産業に学びながら、持続可能なものづくりの意義についても共有していくことが大切だと考えています。

事例の反響と継続した販売

今年度は実験的なものづくりをするだけでなく、実際に販売をしたり、商談会などに参加することで、ものつくり手やつたえ手とつながることを意識しました。2019年度に製作した緞通「NEW DANTSU」を継続して製造。今年度の実例とあわせて商談会で紹介しました。クリエイターやバイヤーから一定の評価を得ることができ、伝統工芸や地場産業に取り組むつくり手たちと出会うことがで

きました。一方で、価格の高さや製品数に限りがあることなど、継続した販売やつくり手の収入につながるまでの工夫がまだまだ必要であることがわかりました。一般的な福祉施設でつくられる製品との違いを明確にし、生活のなかでの使い方をイメージさせる伝え方など、購入につながるまでの誘引をどうつくっていくか、さらなる検討をしていきます。



春日大社にて、境内の杉を用いた商品の完成を報告



障害のある人と共に養蚕に取り組む。シルクを用いた商品化を検討中

新型コロナウイルス感染症の影響

展覧会の関連トークにおいて、会場での参加には人数制限を設けるなどの影響を受けました。これに対して、映像制作業者に依頼してトークの様子をオンライン配信するなどの対応を取りました。また配信中は、展示に関わった人によるトークのほか、展示の様子を展覧会ディレクターによる解説とともに中継し、動画をアーカイブとして残しました。

事業名

障害のある人の表現と知的財産権に関する 知財学習プログラムの開発

団体名

一般財団法人 たんぽぽの家

所在地：奈良県奈良市 URL：<https://tanpoponoye.org/>

事業概要

知的財産権とは、アート活動や商品開発によって生み出された技術や表現の価値を守る権利である。本事業では知的財産の公開や保護について、楽しみながら学べるカードゲーム『ちょいワル クリエイターズ』を教材として制作した。また、さまざまな立場の人にかかわり、保護方法などが複雑な知的財産権や知的財産について、基本的な考え方や最新の動向を学ぶことへの橋渡しとなるフリーペーパーを制作。これらを用いた知財学習プログラムの存在を、オンライン学習会等を通じて普及に努めた。

事業 URL：<https://chizai.goodjobcenter.com/>

身近な生活にかかわる基本のルール “知的財産権”について学ぶ

実施内容

カードゲームや学習会で知財を身近に考える

●知的財産権学習カードゲーム

『ちょいワル クリエイターズ』の制作
曲者ぞろいのクリエイターがさまざまな手段を駆使し、自分の知的財産を世の中に広めるために繰り広げる対戦型のゲームです。悪徳業者や産業スパイたちも暗躍する中で、権利保護や権利侵害について体感的に学べます。

発行日：2021年3月20日

○第3回 2021年3月9日

「ゲームを通じて知財の仕組みについて学ぶ」

○第4回 2021年3月10日

「野菜とファッション～小規模生産者と消費者をつなぐブランド戦略最前線～」

●フリーペーパー『ももってひろげる知財学習

ちまたのちざい』の制作

さまざまな分野の現場における「知財（権）と学び」について調査取材し、フリーペーパーを制作しました。知財・知財権を知る／学ぶことでどんな可能性がひらけていくのかを伝え、知財・知財権を学ぶ動機へとつなげます。

発行日：2021年3月20日

●知財学習プログラムオンライン学習会

今年度事業の成果報告を兼ねてオンライン学習会を開催しました。

○第1回 2021年3月2日

「表現をめぐる知的財産権について考える
～基礎編～」

○第2回 2021年3月3日

「障害のある人のアート活動の権利保護と
マーケットとのかかわり」



フリーペーパー

『ももってひろげる知財学習 ちまたのちざい』の表紙

事業の効果

知的財産権にまつわることで、大切に思っている基礎的な事柄を伝える

学習カードゲームやフリーペーパー、オンライン学習会を通じて、知財になじみのない人たちに対して、知財にまつわる基礎的な事柄を伝えることができました。知財や法について学ぶことは一見難しいことですが、大切なのはどのように活用・運用するかです。たんぼぼの家では、障害のある人たちのアート活動を社会に発信する方法として、作品の販売や商

品化などに取り組んできました。2007年には2つのNPOと協働し、障害のある人のアートを企業などが広報や商品に二次使用できる仕組み「エイブルアート・カンパニー」を設立しました。そうした経緯もあり、本事業で、知財にかかわる契約などで悩んだり学んできたことを伝える学習会を企画すると、すぐに定員に達するほど反響がありました。

例えば、農とファッションの共通点から知財を考える

フリーペーパーのなかには、例えば、農やファッションに関する特集インタビュー記事があります。一見何も関係ないように思える農とファッションですが、知財という観点から見るとたくさんの共通点があります。どちらも他者との協働、消費のされ方次第（どう料理されるか、どう着こなされるか）で価値が生まれるなど、独占するのが難しいオープンな

特質を持っているということ。しかし、ファストフード、ファストファッションなどの流入により、それぞれなんらかのかたちで保護を必要とする分野であることなどです。フリーペーパーにはその他にも、今の時代ならではの「知財を学ぶこと」に触れる情報が満載。多くの人に手に取っていただきたい媒体になりました。

活動をブランディングし、地域と共生するヒントを見つける

オンライン学習会では、私たちの生活のごく身近にある、知的財産のブランド価値をどのように認め、どこまで保護し、後世につなぐかたちで広めていったらいいかについて考えることができました。ものづくりやアート活動を行う福祉施設など、私たちのよう

な小規模生産者が、自分たちの活動をどうブランディングし、地域とともに共生できるのか、ヒントを得ることができました。また知財・知財権を学ぶには、いわゆる座学だけでなく、ゲームを通じて経験的に学ぶことの大切さも伝えることができました。



知的財産権学習カードゲーム
「ちよいワル クリエイターズ」のパッケージ



カードゲームやフリーペーパーについて検討するオンライン制作会議の様子

新型コロナウイルス感染症の影響

カードゲームやフリーペーパーの制作会議は対面とオンラインのハイブリッドとしました。学習会もオンライン開催としました。さまざまな影響については、主にオンライン会議システムを多用することで対応しました。計画を断念しなければならないこともあった反面、遠く離れている人たちと気軽に会議をできるのはメリットにもなりました。

事業名

共生社会東アジアモデル構築事業 「演劇で編む『共に生きる』」

団体名

特定非営利活動法人 鳥の劇場

所在地：鳥取県鳥取市 URL：<https://www.birdtheatre.org/birdtheatre/>

事業概要

障害者による演劇創作の取り組みを、日韓共同で行う事業。初年度は、同事業のために韓国の作家が書き下ろした戯曲を、日本は鳥の劇場がコーディネーター、韓国は韓国芸術総合学校がコーディネーターとなり、両国それぞれに障害のある人とのリーディング作品を創作した。稽古や上演を通して見つけた課題や工夫を日韓で共有し、創作現場へフィードバックし、いかしていく実践のほか、稽古の様子や上演作品をネットで公開する。

演劇創作を通じて障害という壁を越え、 共に生きる豊かさを発見する

実施内容

国境の壁を越えて共に作品を創作、創作過程を通じて「共生」について考える

障害のある人たちとともに国境の壁を越えて、リーディング公演『とある村』を創作。演劇創作には、深い信頼関係が不可欠。鳥の劇場は12回を超える国際演劇フェスティバルの実践の中から、演劇人同士の国境を超えた信頼関係を築いてきた。また、鳥の劇場がプロデュースする「じゆう劇場」の活動を通して「共生社会」のもたらす豊かさについても実感することが多い。それらの経験から、演劇を軸に国を超えた「共に生きる社会」の東アジアなりの形を模索し構築することができると考えた。

今回韓国側のコーディネーターを務めるのは、鳥の劇場と3年前より協定を結んでいる韓国トップの国立芸術大学韓国芸術総合学校である。この信頼関係をベースに、韓国人劇作家イ・ヨンジュ氏に戯曲の創作を依頼。演出家は日韓両国で1名ずつ推薦。韓国人演出家はチョン・ソンギョン氏、日本人演出家はもりながまこと氏。

日本で創作するリーディング作品の出演者は、障害者

アートの分野で先進的な福祉施設「たんぼぼの家」から10名が参加。上演は、無観客でYouTubeでの無料ライブ配信を実施した。配信では日本語字幕+日本語手話の版と、韓国語字幕の版の二つを配信。上演後はYouTubeで公開しながら、日本チームと韓国チームとのアフタートークを行った。創作過程では、zoomを使った情報共有と意見交換会を兼ねたミーティングを実施。鳥の劇場ホームページで、創作の様子や日韓で交換した稽古動画、意見交換の様子も公開予定。

●リーディング作品「とある村」

YouTube ライブ配信上演

開催日（期間）：2021年3月2日～

上演場所：たんぼぼの家 わたぼうしホール

対象：演劇作品に興味のある方、障害者アートに興味のある方

参加費の有無：無料



「たんぼぼの家」での稽古の様子



「たんぼぼの家」での稽古の様子



「たんぼぼの家」での稽古の様子

事業の効果

「障害+演劇」を通じて、国際交流するための方法を模索

近年、障害者による様々な芸術分野での取り組みが行われる中、演劇での取り組み、加えて海外との共同作業は全国的にもまだまだ例が少ない。当事業では、隣国韓国と演劇作品の共同制作を行い、文化・歴史において多くの共通点を持ち、同時に多くの相違点を持つ両国が、それぞれどのように障害者との作品創作に取り組むのかを知り、互いに学び合うことを通じて、今までにない形「演劇+障害」での国際交流を目指す。韓国チームとは、創作期間中2回にわたって稽古動画の共有と、zoomでのミーティングを行った。韓国の作家や、両国の演出家が、障害者に対しどんな意識を持ってこの作品創作に向かっているのかなどについて

意見交換を行い、それぞれの考えを知ることができた。また、国境を超えた交流が、障害のあるなしという枠を超えて、表現者同士であるということにより客観的に捉えられる機会を作り出してくれた。演劇を創作する上で一番大事なことは、互いを信頼することであるが、zoomを通してその信頼関係は変わることなく、熱のこもったミーティングは非常に有意義な内容で、互いに刺激し合い、より良い作品づくりに繋がったと感じる。事業の形は、当初企図したものとは別ものとなったが、「障害」という困難な課題を演劇の国際共同により考えるという大目的のためには、非常に意味ある実践となった。

「国境を超えた共生社会」を実現するモデルケースに

創作期間中から公演中、公演後の振り返りまで含めて、作品創作のプロセスを複数回にわたってレポートし、ホームページなどで公開。障害のある人も巻き込みながら、海外との共同作業によって演劇作品を作り上げる試みは実践が多くない。当事業の内容を、誰もがア

クセスできる形で公開することにより、この事業の周知を図り、さらにはこの事業が一つのモデルケースとなり、日本の様々な芸術団体が、「障害者+演劇」で国際交流を行い、「国境を超えた共生社会」を実現していくための布石となることを目指す。

演劇創作のバリアフリー化

創作の過程で、出演者の一人ひとりの障害に合わせ、演じやすくなるよう工夫を重ねた。通常の台本の文字が読めない方にはプロジェクターで大きく映したり、プロンプターをつけたり、文字は読めても台本をめくることができない方には、iPadを車椅子につけ、さらに補助者についてもらったりなど。今回は無観客かつ

配信のみだったので、途中で映像を入れ、出演者の給水と休憩を挟むことができた。出演者全員が障害のある方で、かつ障害の程度も様々であったため、次のステップである日本と韓国との共同制作のバリアフリー化に向けて、非常に意義のある取り組みとなった。

新型コロナウイルス感染症の影響

当初の計画では、日韓両国からの障害のある方・ない方を交えたメンバーで舞台作品を共同制作する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、両国間の移動が実質的に不可能となり、当初イメージの共同制作の実施が困難に。そこで、両国の俳優の出演という目標を2021年度以降に設定し直し、今年度は日本と韓国それぞれでリーディング作品の創作をするという方向に舵を切った。同じ戯曲を使いながら日韓それぞれに作品を作ること、障害のある方との作品創作に対する取り組み方や考え方の似ているところ・異なるところを互いに発見し、理解し、認め合い、それぞれがさらなる課題の発見・その解決方法の模索につなげていったと感じる。また、日本の出演者は国内から広く募集する予定であったが、感染の拡大防止という観点から、演出家が在住する奈良県内の事務所に絞って募集することになった。既往症のある出演者の健康を第一に考え、発表公演は無観客、かつネットでの配信（無料）とした。



公演チラシ

事業名

島根県民会館 インクルーシブシアター・プロジェクト

団体名

公益財団法人 しまね文化振興財団

所在地：島根県松江市 <https://www.cul-shimane.jp/hall/>

事業概要

島根県民会館では 2016 年に視覚障害のある人とダンサー・振付家である田畑真希氏が出会って始まったダンス事業が、障害の有無に関わらず文化芸術を楽しみ、参加しやすい環境づくりを目指して「島根県民会館インクルーシブシアター・プロジェクト」へと発展。今年度は、「ダンス公演」「音声ガイド解説者養成講座」「アウトリーチ」を行う予定。

事業 URL：<https://shimane-itp.wixsite.com/website>

視覚障害のある人とアーティストとで始めたダンス事業をきっかけに あらゆる人が芸術を楽しめる劇場づくりを目指して

実施内容

視覚障害のある人たちとの活動が、見える見えないに関わらず参加できる公演へと発展

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、1月に予定していた「ダンス公演」を実施できるかの危惧があったため、中止等になっても活動の継続・発信できるようにダンス映像作品(音声ガイド付き版あり)を制作することとした。また、2017年から音声ガイド解説者・田中京子氏と連携し、音声ガイド解説の人材育成を行っており、今年度はダンス映像作品に対し、演出の田畑氏や視覚障害のある人をモニターとして迎え、作品の演出意図と当事者のニーズを近づけ、求められる音声ガイドとは何かを考え制作した。

●ダンス映像作品短編集「或る椅子の、つばやき」

撮影日：2020年10月31日～

11月3日、28日、29日

(オンライン公開：2021年3月3日～)

場所：松江市内各地(公園、古墳など)、島根県民会館内大ホール舞台上など

演出：田畑真希

映像撮影・編集：吾郷克彰

音声ガイド解説：田中京子(Reading ACT)

内容：視覚障害者3人を含む市民ダンサー(ビヨンド・タバニー)11人とタバマ企画ダンサー3人が集い撮影。作曲・録音は、島根・岡山・東京在住のミュージシャンに依頼。

●ダンス映像の音声ガイド解説制作

開催日：2021年2月8日～25日

会場：オンライン、島根県民会館

対象：音声ガイド解説を学びたい人、視覚障害のある人を含むモニター

参加人数：10名

内容：ダンス映像作品「或る椅子の、つばやき」の音声ガイドを、演出の田畑氏や視覚障害のある人をモニターとして迎え、演出意図と当事者のニーズを近づけて制作。



ダンス映像作品の撮影風景



ダンス映像作品の撮影風景

ダンス映像作品短編集
「或る椅子のつばやき」



音声ガイド
なし



音声ガイド
あり

事業の効果

視覚障害のある人と一緒に踊ることで生まれる表現がある 多様な人たちの交流の場所、生きがいを感じられる場所に

当初は視覚障害のある人とのワークショップにボランティアが加わりサポートするという関係でしたが、近年は、視覚障害のある人とだからこそその表現が生まれる、自由でのびやかな場所であることに魅力を感じるなどの理由で、障害の有無に関わらず子

どもから高齢者までが集う場所となっています。今年度はほかの障害特性のある人へも広げる予定でしたが、感染症の影響で中止となり、来年度以降に取り組む予定です。

独自の演出方法と舞台スタッフの工夫が障害の不自由さを解消し、自由な表現へつながっている

視覚障害のある人が障害のない人に手を引かれて舞台に出たり袖に入ったりするのではなく、演出家の田畑氏により、床の上を袖から転がって出てくる、舞台上に貼られたテープを剥がしながら出ていくなどの演出、糸やゴムを使ってほかのダンサーと距離を保ったり関係し合ったりという触感を使った演出など、不自由さを解消しつつ自然で興味深い表現に昇華されています。

また、舞台スタッフが舞台袖からリノリウムに若干

の凹凸を作ることで、足で場所を確かめられるようにするなど、公演やワークショップでの安全に配慮した工夫なども安心できる場所づくりの重要な要素となっています。今年度は長く参加する視覚障害のあるダンサーが映像作品でのソロ作品に出演したりと、表現者としてステップアップしています。誰のまねでもなく、動きが内面から湧き上がるような表現が、ほかのダンサーへの刺激にもなっています。

障害がある人が芸術を楽しむことをあきらめない 鑑賞サポートの実施と人材育成

島根県民会館では知的・発達障害者に向けて劇場体験プログラム「劇場って楽しい!!」(企画：ビッグ・アイ)や映画会、ダンス公演などに鑑賞サポートをつけて実施しています。しかし、全国的に鑑賞サポートの担い手が不足し、特に地方では鑑賞サポートのある公演は稀で、選択肢が少ないのが現状です。

また、これまでのダンス事業で当事者から「仲間の

ダンスを観たい、感じたい」との意向が出されたことを受け、2017年度からダンス公演にライブの音声ガイドをつけ、2018年度から音声ガイド解説者養成講座を実施。人材の育成・確保を進めました。今後は蓄積したノウハウを県内外に発信することを目指します。



開場時もパフォーマンスを行い来場者も楽しめる工夫をした(昨年のダンス公演より)



目の不自由な出演者のソロダンスシーン(昨年のダンス公演より)



講座受講者を含むチームがライブで音声ガイドを実施(昨年のダンス公演より)

新型コロナウイルス感染症の影響

盲学校でのアウトリーチ(ダンス)は、県外講師の招聘、表現を引き出すための触れ合いが難しく、中止。1月予定のダンス公演は、医療関係者の参加や障害者のヘルパーの確保が難しいなどの懸念や、首都圏に緊急事態宣言が発令されたこともあり、安心して公演ができる状況ではなく断念し、映像作品をオンライン公開しました。

事業名

～つくる・つながる・つたえる・つづく～ 「おきらく劇場ピロシマ」による 文化芸術活動促進事業

団体名

一般社団法人 舞台芸術制作室無色透明

所在地：広島県広島市 URL：https://www.engeki-hiroshima.com

事業概要

多分野連携のもと豊かな共生社会を実現するために、丁寧で地道かつ継続できる活動の意義と必要性をあらためて問い直し、提唱することを目的とする。体験型のワークショップの開催（2回）、演劇（創作）の場づくり（6回）を行う。また、継続した活動から生まれた多様なコミュニティの在り方を社会に伝えるため、障害者も参加する劇団の公演を県外で行う。すべての活動を通じて、演劇ファシリテーターの育成を行う。

演劇を通じて「他者ととともに在る・表現する」場を地域につくり、 創造的な共生型社会実現の手法を広く伝える

実施内容

多様な参加者それぞれが1人の表現者として、体を動かしたり、創作したりを楽しむ

ワークショップは、他都市で先駆的取り組みを行う講師を招いて実施。居住地域で誰でも自由に参加することのできる演劇の特性を生かした創作の場をつくる「演劇クラブ」は、定期的実施。これらの活動には、障害のある人・子ども、支援者、演劇に関心のある人が、無料で参加できます。また、他県の演劇フェスティバルで公演も行います。

●演劇ワークショップ 広場をつくろう 2020

開催日：① 2020年7月26日 ② 8月29日

会場：① 広島市東区地域福祉センター ② JMS アステールプラザ

参加人数：合計 37名

講師：永山智行（劇団こぶく劇場）

内容：演劇の手法で交流し、演劇を体験。体を動かすことや創作することを楽しむ。



「広場をつくろう 2020」1回目
拍手を使ったコミュニケーションゲーム

●おきらく劇場ピロシマ演劇クラブ

開催日：① 2020年6月28日

② 7月19日

③ 8月23日

④ 9月21日

⑤ 10月25日

⑥ 2021年1月24日

会場：①② 広島市中央公民館

③④ 広島市東区地域福祉センター

⑤ 広島市三篠公民館

⑥ オンライン

参加人数：合計 76名

ファシリテーター：坂田光平

内容：演劇を用いたコミュニケーションプログラムの実践や演劇創作。

●第20回全国障害者芸術・文化祭みやざき大会 演劇フェスティバル出演

開催日：2021年2月20～21日

（2021年4月へ延期）

会場：宮崎県庁各施設特設劇場（座席数50席）

内容：「おきらく劇場ピロシマ」の「ウタとナンタの人助け」の公演（2回）。
障害者芸術団体とも交流。

事業の効果

多様な人々とともに表現することで 互いに高め合う関係になれることを実証するために

体験型ワークショップや演劇クラブでは、障害のある人や支援が必要な人に限らず、一般の人、支援者、演劇を志す人、地域の俳優など、多様な人々が「1人の表現者」として参加し、ともに活動します。自分自身が表現するだけでなく、他者の表現を受け入れ、対等な関係で交流・創作することで、参加者は、表現のう

えでは、障害の有無は関係の分断を生じさせないことに気がつきます。この気づきは、他分野連携による真の共生型社会実現に欠かせない礎となります。これを可能にしているのは、事業に「ともに在ること」「ともに表現すること」という演劇の特性を活かしていることにあると考えています。

他地域への広がりを目指して未来への一步をつくる 公演では、製作過程にも興味関心をもってもらう

社会への啓発活動も目標の一つです。その取り組みとして、全国障害者芸術・文化祭の演劇フェスティバルに、劇団「おきらく劇場ピロシマ」が出演します。観客に、舞台上ではなぜか完全に成立する豊かな共生社会の実現の不思議を体験してもらうととも

に、作品の製作過程に興味関心をもってもらうことで、この事業モデルを広げることを目指しています。一方、各福祉施設への講師の派遣は、コロナ禍において実施に至っていません。公演・講師派遣という形にこだわらない方法を検証する必要があります。



「広場をつくろう 2020」1回目 手紙に思いを書く・相手に伝える



「広場をつくろう 2020」2回目 参加者と俳優による即興芝居



「おきらく劇場ピロシマ演劇クラブ」3回目 参加者の顔合わせ

新型コロナウイルス感染症の影響

会場の公共施設が臨時休館となり、演劇クラブはオンラインで開催しました。公演稽古は、動きの伴わない脚本の読み合わせなどをオンラインで実施。また、日程を見直し、会場の再開を待つこととしました。日程の変更、対面で会えないなどに対する参加者及び保護者の不安を軽減するため、コミュニケーションを取るよう努めています。

事業名

障がい者支援施設へのアーティスト派遣と障がいのある人との表現活動促進事業

団体名

NPO 法人シアターネットワークえひめ

所在地：愛媛県松山市 URL：<http://tne-ehime.org/>

事業概要

ファシリテーター養成プログラムでは、障がいのある人との表現活動に取り組んでいるアーティストを招き、障がいのある人との表現活動について共に学び、課題を共有した。アーティスト派遣プログラム「松山盲学校ドリームラジオ」では、地元アーティストが松山盲学校の児童生徒全員とラジオ番組を製作。イマジネーションが立ち上がる協働作業に取り組んだ。

障がいのある人と共に表現し、共につくる。 地元アーティストとチームになってラジオ番組も製作

実施内容

障がいのある人との表現活動を共に考えるプログラム

●ファシリテーター養成プログラム

障がいのある人との表現活動に興味のある人、特に障がい者支援関係者を対象に、表現活動を企画運営するコーディネーターを養成するプログラムを行いました。

①障がい者との表現活動のあり方を考える (理解を深めよう)

開催日：2020年12月21・22日

参加理由や障がい者に接する上で抱えている課題などについて語り合い、全員で共有しました。さらに障がい者との表現活動を想定して、音楽を聴いて頭に浮かんだことを言葉で表現するワーク、ジェスチャーゲームを紹介しました。障がい者との表現活動を想定して振り返りました。

②障がい者をつくる演劇（実践例を知ろう）

開催日：2021年1月20・21日

障がい者と共に作る事例として、宮崎県立芸樹劇場の劇団「みやざき◎まあるい劇場」の演劇事例を紹介。さらに身体を使う簡単なワークやコミュニケーションの基本、セリフを使ったワークについて学びました。

●アーティスト派遣プログラム

「松山盲学校ドリームラジオ」

開催日：2020年11月11日、12月17日、3月9日

場所：松山盲学校

松山盲学校の児童生徒や教職員を対象に、眠っている時に見ている夢のエピソードをもとにしてラジオ番組「ドリームラジオ」を作成しました。



「松山盲学校の方々と」 ジングルづくり



「松山盲学校の方々と」 ラジオ番組を収録

事業の効果

障がい者との表現活動に対する理解の促進

ファシリテーター養成講座では障がい者支援にかかわる方々が日頃から抱える課題を共有しました。また映像での実践例紹介やワーク紹介によって、障がい者との表現活動を具体的に知ることができ、将来的にアーティストとの表現活動に取り組む障がい者

支援施設が出てくる可能性が広がりました。またオンライン見学を実施したことで、開催地である愛媛県松山市以外の参加があり、より広範に人々に届けることができました。

知っているようで知らない他者を知る機会

ドリームラジオのワークショップでは、眠っている時に見る“夢”をテーマに互いのイメージを共有しました。アイドルの夢を見たと話す子どもや先生、親が登場した夢について話す子どもなど夢の内容はさまざまです。夢を分析することが目的ではありませんが、日常生活の反動が見て取れる夢が多くありました。ワークショップを通じて気づかされたのは、

盲学校の子どもたちは決して特別ではなく、どこにでもいる子どもであり、みんなが優しいということ。そのためあえてワークショップでは「多様性」や「寛容性」を掲げませんでした。“夢”を通じて互いを掘り下げること、知っているようで知らなかったコミュニティの仲間について知る機会になりました。

事業を継続していくための新たなフレームの発見

コロナ禍での変更続きのため、苦肉の策として行ったラジオという方法論は、今後さまざまな展開の可能性を秘めたメディアになる予感があります。ラジオというフレームはどのようなプログラムにも生かすことができそうです。ラジオは音声しか使えませんが、

鋭敏な感覚の世界に生きる盲学校の子どもたちにとってはハイスペックなメディアです。ラジオ番組を作るためのふれあいを経て、イメージーションが立ち上がっていく協働作業を続けていきたいです。



ファシリテーター養成講座Ⅰ 有門正太郎



ファシリテーター養成講座Ⅱ 永山智行

新型コロナウイルス感染症の影響

ファシリテーター養成講座では、感染予防対策のために必要最低限の講座以外は参加制限を設ける福祉事業所が出るなど、参加者数が想定より減りました。また、松山盲学校では県外から講師を招くことができなくなりました。緊急事態宣言の延長などによって講座の実施回数も減りました。これに対する対策として、県外の講師にはPCR検査を受けていただき、内容をワークショップ形式から対面型の講座に変更。オンラインでの参加も呼びかけました。受講者への体温測定、消毒、換気・消毒など感染対策に配慮しました。さらに松山盲学校への派遣は地元アーティストに依頼し、地元でチームを作ってモデルとなるオリジナルプログラムを模索しました。

事業名

パーキンソン病患者による ダンス活動の普及事業～継続とエビデンス編～

団体名

一般社団法人 パラカダンス

所在地：福岡県福岡市 URL：<https://www.facebook.com/paracadance>

事業概要

パーキンソン病（PD）患者にダンスに取り組んでもらい、リハビリテーション効果を得ながら QOL の向上を促す。さらに、パーキンソン病に対するダンスの効果と取り組みを全国に広める。主な事業は、毎月の「定例ワークショップ」、福岡大学病院の坪井義夫教授らが立ち合う「PD ダンスカフェ」、2か所の PD 患者専門施設の入居者・職員が参加する「PD ハウス 週一 WS」。医学的な観点からの検証も行う。

ダンスワークショップなどをパーキンソン病患者に提供 医学と芸術、各プロフェッショナルが先駆的にアプローチ

実施内容

ふるえ、動作緩慢など運動症状がある PD 患者が、ダンスで表現し仲間とつながる

本事業は国内では先駆的な内容で、各分野のプロフェッショナルが集ってそれぞれのアプローチ方法で活動に取り組んでいます。また、エビデンスを残すため成果検証として医学的視点と芸術活動としての視点、双方向から行っています。

参加者や施設スタッフからの声も常時取り入れることで参加者にとってよりよい環境をつくること、動画での活動記録の作成にも取り組んでいます。

●定例ワークショップ

開催日：2020年6月～2021年2月（月1回）

会場：福岡市内公共施設

内容：ニューヨークから始まった Dance for PD® を元に福岡のメンバーで独自に「PD ダンス」として開発。

参加者の表現を引き出し、発表の場を想定した作品づくりを目指す。

●PD ダンスカフェ

開催日：2020年8月1日・10月24日

会場：福岡大学病院多目的室よりオンライン配信

内容：ダンスワークショップとパーキンソン病のレクチャー、カフェタイムでの交流や個別相談会。

●PD ハウス週一ワークショップ

開催日：2020年5月18日～2021年3月29日
（週1回）

会場：PD ハウス野芥・PD ハウス有田

内容：パーキンソン病専門住宅型有料老人ホームでのダンスワークショップ。入居者や施設職員が参加。



月イチ PD ダンスの様子



第3回 PD ダンスカフェの様子



週イチ PD ハウスダンスの様子

事業の効果

オンラインの「PD ダンスカフェ」レクチャー・相談会に全国から参加 画面越しのダンスに、リラックスした人も、戸惑う人も

PD ダンスカフェは、オンライン開催となり、結果的に全国の仲間とつながることができました。コロナ禍で外出することもできず、イベントも軒並み中止になっていた初夏を乗り越えて参加した人の中には、ダンスをやってみての感想を伺った際、号泣する人もいました。オンラインで画面越しにつながるという方法は、自分が普段慣れ親しんでいる場

所から自分のペースで参加できること、また人の目を気にすることなく集中できることが安心感を生み、リラックス効果も得られたようです。

一方、いつもとは違うシチュエーションに戸惑う人がいたものの、その感覚を共有し連帯感を感じることができました。今後のコミュニティー形成において大きな前進となったといえます。

中断により、笑顔や会話が減少。 やめるわけにはいかない「PDハウス週一ワークショップ」

一回目の緊急事態宣言が出される直前まで、一切活動できない時期があり、その間に入居者には「笑顔が減った」「会話がなくなった」「元気がない」「仲が悪くなった」など、活動の中断による大きな影響が出ました。そこで、直ちにオンラインでの実施に向けて準備を始めました。施設側の多大な協力により5月中旬に再開。回を重ねるごとに以前の明るさ

が戻りました。開始前には早めにオンラインを接続しており、その時間を利用して両施設間でコミュニケーションもとられていました。

なお、オンラインでは、音響の調整が難しく、音響の善し悪しによって、参加者の動きに影響があることがわかりました。



月イチPDダンス～オンライン編の様子

新型コロナウイルス感染症の影響

ワークショップが実施できなくなり、「PDハウス週一ワークショップ」は、講師宅と2施設をオンラインでつなぎ実施。音楽と音声を同時に届けるには技術的な調整が必要で、現在も改善を続けています。「PDダンスカフェ」は、オンライン参加と動画配信視聴によって、「定例ワークショップ」は、会場参加とオンライン参加によって実施しました。

Reverse Outreaches

～文化施設職員向けの社会包摂普及事業～

公益財団法人 宮崎県芸術文化協会

所在地：宮崎県宮崎市 URL：<https://www.miyazakigeibun.jp/artscouncil-miyazaki/>

事業の目的は、文化施設職員を対象にしてソーシャルインクルージョンの心持ちを育てることにある。この目的を達成するために、文化施設職員や文化行政職員を対象に、障害のある人の表現活動に触れると共にステージを創る機会を設けた。新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、開催回数を減らすことにはなったが、県内だけではなく、全国に影響を与える事業となった。アウトリーチ（対象者のところに向いて手を差し伸べる）をされる側の問題は語られるが、アウトリーチする側の問題がこの事業で議論されたことは成果として大きい。

文化施設・文化行政職員を対象に ソーシャルインクルージョンの心持ちを育てる

実施内容

オンラインイベントで文化行政担当者らに大きなインパクトを与える

● REVERSE OUTREACHES # 1

障害福祉施設等でバケツドラムづくりのワークショップを行っている、元ブルーハーツの梶原徹也さんを講師に招いてワークショップを実施した。知的、発達、視覚、聴覚等の障害のある方を対象にバケツドラムの作成やセッションを行ったほか、県庁職員や一般の来場者らを前にパフォーマンスも披露した。

開催日：2020年12月21～24日

場所：宮崎県庁

● REVERSE OUTREACHES # 2

静岡県の認定NPO法人クリエイティブサポートレッツが行っている「スタ☆タン!!」を参考に、障害のある人もない人も上がれるステージを開催した。ART SIDERの上田賢治さんは、先天性の障害で腹筋がないため、大声やシャウトを出すときには介助者が腹部をグッと押し込むことで発声をサポートする。両者の阿吽の呼吸と尖ったロックのパフォーマンスにグランプリが贈られた。

開催日：2021年2月23日

場所：メディキット県民文化センター（宮崎県立芸術劇場）

● REVERSE OUTREACHES #3

「舞台・はぐくみ・社会包摂」

障害のある人となない人が共にパフォーマンスを行い、それぞれに自由な表現を楽しむイベントを開催した。同イベントは今年で4年目になり全国的に評価が高い反面、県内ではあまり知られていない。今回は感染対策としてステージ上のメインスクリーンの前に透過スクリーンを設置し、メインのスクリーンには2つの福祉施設の状況、透過スクリーンにはジャワ舞踏家の佐久間新さん、音楽家の野村誠さんを映し出し、仮想的にすべての人がステージに上っている状態を創り上げた。

開催日：2021年3月15日

場所：都城市総合文化ホール



ゲスト講師の梶原徹也さんと charuneiro



審査員のみなさん



透過スクリーンを用いた舞台表現

事業の効果

公共施設スタッフへの社会包摂普及の必要性

公共施設のスタッフや文化行政担当職員が、障害のある人の表現活動に触れる機会が少ないことは想定していましたが、障害のある人とかかわる機会や、対応をする機会が少ないということがわかりました。こうしたことの原因としては、障害のことは福祉が担うという縦割りの弊害も考えられます。アール・ブリュットやSDGsが話題となる中、障害者の芸術表現だけではなく、かかわりを持つ機会を増

やすことが必要です。今回の事業は共に表現をつくる、体感する機会を増やすことに重点を置きましたが「一緒にいることの楽しさを受け取った」という感想を、施設スタッフや行政職員からいただいたのは大きな成果でした。直接かかわることより、表現や文化芸術が媒介となることで、喜びや楽しさを受け取りやすくなったということも大事な点だと考えています。

新しい生活様式における文化芸術活動

#3で行った透過スクリーンを用いた舞台表現では、劇場スタッフの新しい取り組みとして議論を行い、リモートだからこそできる表現を追求できました。新型コロナウイルスの感染拡大によって、これまで当たり前のように行っていたことができなくなったために、新しい表現手法の追求ができたことは、予想外の成果でした。ゲストをお招きできない、福祉施設

に入ることができないという状況の中でもできることがあり、それが劇場の新しい使い方につながるものが垣間見えました。多様性の議論はコンセプトや発信の問題ではなく、文化芸術の手法においても必要であり、与えられた課題に対して柔軟に対応する力が求められることがわかりました。

文化行政担当者から多数の感想が寄せられる

いずれの取り組みにおいても文化行政担当者に大きなインパクトを与えることができました。例えば#2のオンラインステージでは、劇場側の担当者から「社会包摂の形としてこのステージは楽しい」また県庁

職員から「こんなに盛り上がった3時間は体験したことがない、あつという間だった」と歓迎する声がか寄せられました。また#1のワークショップは宮崎放送のニュースでも配信されて大きな反響を呼びました。



グランプリのART SIDERのみなさん



ライブの様子

新型コロナウイルス感染症の影響

当初予定していた県内各地での10回のワークショップとレクチャーの開催が、県内の移動が難しくなり、ゲストを県外から招くことができなくなりました。また、障害者の感染リスクを理由に、障害福祉施設との連携や、障害者の参加ができない状況が続いたため、ワークショップ・レクチャーへの参加が見込めなくなりました。これに対しては、開催時期を集中させ、感染拡大の時期を外し、開催回数を減らすことで対応しました。また、事業効果を上げるためにも1回の事業の規模を拡大させ、参加についてはオンラインを中心に実施しました。

事業名

おきなわインクルーシブアートプロジェクト

団体名

一般社団法人 エーシーオー沖縄

所在地：沖縄県那覇市 URL：https://www.acookinawa.com/

事業概要

インクルーシブとは何なのか。そして誰 1 人残さず全ての人たちがインクルーシブな社会で生きていくためにどのような活動を実践する必要があるのか。それをアートや演劇を通じて、どのようにインクルーシブが関連づけられるのか。この問いかけの元、イギリスと、日本の児童青少年演劇において、障害者の文化芸術活動に精力的に取り組んでいるキーパーソンから話を聞き、インクルーシブについて、そして現在の課題、今後の展望について考えるシンポジウムを実施した。

障害者が積極的に芸術活動へ参加できる環境を作りたい

実施内容

海外での障害者アーティストの活動紹介を通じ、インクルーシブアートの可能性を探る

- おきなわインクルーシブアートプロジェクト
シンポジウム「インクルーシブってなあに？」
- ・開催日（期間）：令和 3 年 3 月 26 日（金）
- ・場所：りっかりっか劇場
- ・対象：参加希望者
- ・参加人数：73 名
（劇場参加 10 名、オンライン 63 名）
- ・参加費の有無：無
- ・実施内容：今回の事業では、「インクルーシブってなあに？」と題して、シンポジウムを実施しました。

シンポジウムの登壇者はアシテジ（国際児童青少年舞台芸術協会）に所属する IIAN（インターナショナル・インクルーシブ・アーツ・ネットワーク）のコアメンバーであり、自身も車椅子でパフォーマンスを行なっているダリル・ビートンさん（イギリス）と、NPO 法人シアタープランニングネットワーク代表であり、舞台芸術関連の職業確立の事業や、芸術の福祉への活用、児童青少年演劇等に尽力する中山夏織さん。イギリスでの事例や、日本でのインクルーシブアートの在り方などを第一線で活動する 2 人の視点から活動や取り組みなどを紹介しました。



登壇者・ダリル・ビートンさん



シンポジウムの様子

左：司会・竹谷多賀子さん、右：登壇者・中山夏織さん

事業の効果

シンポジウムを通じて、インクルーシブアートへの理解と関心を深める

インクルーシブとは何か、を問うことで、初めてインクルーシブを知る人にもバリアを作らず、参加がしやすい環境を作ることが出来ました。また日・英の同時通訳を入れることで、母国語が日本語以外の人も参加可能となり、多くの人に「インクルーシブ」を知って

もらう機会を作ることが出来ました。また、インクルーシブアートの現状、課題を共有することで、障害者による舞台芸術の可能性を、より具体的なビジョンとして捉え、理解と関心を深めることが出来ました。

オンラインのイベント開催で、国内外を結ぶ新たなグローバルネットワーク構築を目指す

オンライン開催になったことで、居住地などにとらわれず、県外や海外も含めて多くの地域からの参加が可能になりました。多様な地域から参加者を集めることで、様々な環境下におけるインクルーシブアートの現状や課題をディスカッションすることができます。これまでのトークセッションでは議論の内容が会場内だ

けで完結してしまっていました。しかしオンライン開催を実施することで、様々な地域や国とのつながりを持ち、課題や今後の展望について、互いに協力・相談することができるようになりました。今後もこうした取り組みを続けながら、インクルーシブアートに関するグローバルネットワークの構築を目指します。



会場・オンラインでも同じ画面を共有した



シンポジウムの様子

新型コロナウイルス感染症の影響

当初は 2020 年 5 月の開催予定でしたが、国内外での新型コロナウイルス感染拡大によって、海外からの渡航制限や、使用予定だった会場の休業などにより、計画に大きな変更が生じました。そのため会場の縮小や入場者制限など、規模を縮小せざるを得ませんでした。当初、予定していたように学校や施設関係者などへの案内が困難になり、参加対象者の獲得に苦労しました。こうした状況を受けて、公演日を 2021 年 3 月に延期。海外アーティストの来日ができなくなった分をシンポジウムに内容変更することによって、参加型の企画へと軌道修正を図りました。また、那覇と宜野座の 2 会場での開催を予定していましたが、那覇 1 カ所に会場を絞り、規模を縮小して感染対策ガイドラインに沿った開催としました。規模の縮小に伴い参加希望者には劇場の来場参加とオンライン参加の両方を案内することとしました。

事業名

音楽体験を通じた不登校児童生徒の社会的接点を作る音楽プログラムの開発と実践、及びその検証

団体名

一般社団法人 楽友協会おきなわ

所在地：沖縄県那覇市

URL：https://www.facebook.com/一般社団法人-楽友協会おきなわ-132098907145560

事業概要

子どもの居場所「kukulu」（那覇市、うるま市）に通う不登校児童生徒（主に中高生）と、「b&g からふる田場」に通う子ども（主に小学生）を対象に音楽ワークショップと、その集大成となる発表会を実施。新型コロナウイルス感染症防止対策でオンラインでのワークショップも試みた。発表会では台本作成、衣装・メイク、事業所紹介の動画やページの作成など、それぞれの得意分野を活かし皆で初のオンライン発表会をつくり上げた。

共通テーマは、1音でも「聴く」「作る」「演奏する」 “やりたい”を引き出し、できる喜びを分かち合う

実施内容

対象年齢が幅広く、音楽に対する興味もさまざま。年齢や興味に留意しアプローチ

今年は音楽ワークショップを開催する事業所が3事業所に増えました。年間を通してワークショップを実施し、ゲストを迎えてホールの舞台に立つことを目標としていましたが、沖縄県緊急事態宣言の発令を受け、新型コロナウイルス感染症防止対策のため、ホールと各事業所をインターネットでつないで、動画配信による発表を実施しました。

3事業所による発表の間には、リアルタイムで創作ワークショップを行い、バラエティーに富んだ内容となりました。

●ゆかいな音楽家と、ときどきひきこもり 2021

～わたしたちのワークショップ大公開！～

開催日：2021年2月6日（土）16:00～17:30

会場：那覇市ぶんかテンプス館ホール、b&g からふる田場、子どもの居場所うるま kukulu より
動画配信

対象：教育関係者、福祉関係者、音楽関係者、ほか
音楽ワークショップに興味ある人

参加人数：70名（スタッフ、出演者）

参加費の有無：無料

内容：3年目の「那覇 kukulu」は音楽付きオリジナル朗読劇と、歌を披露。2年目の「b&g からふる田場」はピアノ演奏や、創作ワークショップでつくったオリジナル曲の演奏のほか、今年、

取り組んできた「ショショローザ」と「替え歌 アイダ」を普段の遊びを取り入れた形で発表。今年度新しく加わった「うるま kukulu」は、さまざまな楽器での「安波節」の演奏のほか、演奏の動画を作成し配信。間にはリアルタイムで創作ワークショップを行った。

● QAB ニュースで紹介されました



文化庁芸術家派遣「ゆかいな音楽家と、ときどきひきこもり」事業による文化芸術活動推進事業（文化芸術による社会福祉の推進を目的）
主催：QAB（一般社団法人） 共催：NPO法人那覇市文化芸術推進センター（NPO法人） 協賛：（一財）楽友協会おきなわ

ゆかいな音楽家と、ときどきひきこもり
わたしたちのワークショップ大公開！

子どもの居場所「kukulu」、b&gからふる田場、うるま市の子どもの居場所、音楽関係者や音楽家たち、作曲家の発見を一緒に交流を促します。コロナ禍の1年ですが、ワークショップは続々と開催中！
今年度は1音でも「聴く」「作る」「演奏する」がテーマ。
お気に入りの「音」を聴き、息を合わせてから、肩や楽器、スマートフォンで、音楽を体感で楽しみましょう。無料のワークショップを共同開催し、オリジナルの動画を配信し、わたしたちのワークショップを皆さんに届けたいです！

2021. 2.6（土）16:00～
YouTubeにて無料ライブ配信！

配信URL
YouTube

イベントの詳細は
こちらから
facebookページ

出演者
子どもの居場所「kukulu」（那覇市）
b&gからふる田場
OUT REACH（コミュニティ）
NPO法人（共催）と楽友協会おきなわの音楽家たち

楽友協会おきなわ 090-3733-2014（代表）
info@kukulu.org@gmail.com
NPO法人からふる 098-943-8502
info@kukulu.churayuki.org

楽友協会
おきなわ

文化芸術
おきなわ

事業の効果

音楽をツールに、不登校の子どもの自信とコミュニケーション能力を高める

沖縄県では、高校生の不登校が全国ワースト1位で、就職率の低さなどの一要因といえます。これまで事業に参加した子どもたちの声からは、「やりたくないことを強制される」という経験が、「できない自分が嫌になる」という自己肯定感の低さにつながり、大きな心理的負担となっていることがわかります。そこで当事業は、一方的な誘導を避け、子どもの興味・関心のあることや意見を取り入れて進めました。発表会では、これまで様子を見るだけで参加しな

かった子どもたちが、今年は舞台に立ち成長が見られました。発表会後の感想でも「緊張したけど楽しかった」「予想以上にできた」「来年はドラムをやりたい」など肯定的な内容が多くありました。また、音楽に欠かせない「傾聴」が、コミュニケーション能力の向上につながっていると感じています。

なお、安定して通所できない子どもも多いため、音楽ワークショップや発表会では、計画に余裕をもたせ、柔軟に対応することが不可欠です。

自分の得意で参加し、舞台をつくることは、小さな社会を経験すること

発表会では、舞台上で演奏や演技を披露する人だけでなく、人前に出るのが苦手な子どもたちが裏方で重要な役割を担います。それぞれ得意なことや興味を活かして、小道具や衣装、メイク、ビデオ撮影、配信に使用する動画の作成、パソコンやスマホによ

る事業所紹介ページの作成など自分のできることで協力して初めてのオンライン発表会をつくり上げました。このような経験は、実社会の仕組みに触れることになり、こうした機会の提供が社会的自立の一助になると考えています。

不登校の子どもたちへの社会的理解の深まりと、音楽家の社会参画における多様性の示唆

本事業の効果として以下のことが期待されます。

- ①不登校児童支援・子育て支援の団体と、音楽団体である当法人が一緒に取り組むことで、異分野連携によるモデルケースとなった。
- ②メディアで広く配信されることで県内の不登校児童生徒の存在が可視化され、社会的理解が深まるとともに、参加事業所以外の不登校児童生徒やその家族に活動を知ってもらうきっかけになる。
- ③音楽における社会活動の可能性を提示することで、音楽家の社会参画への意識が高まる。



新型コロナウイルス感染症の影響

密を避けるため、全員ホールに集まって同じ舞台に出演することができなくなりました。また、ゲストで出演予定だったバンドが感染症の影響でキャンセルとなり、成果発表ではプログラム内容を一部変更し、ホールと各事業所をつないでライブ配信を行いました。

事業名

ゆいまーるミュージックプロジェクト

団体名

一般社団法人 琉球フィルハーモニック

所在地：沖縄県那覇市 URL：https://ryukyuphil.org

事業概要

音楽や福祉などの専門家が、障害のある人とその家族、関係者が心ゆくまでコンサートを楽しめる環境づくりについて話し合ったうえで、「美(ちゅ)らサウンズコンサート」を開催。今回は、「気軽にオーケストラを楽しむA公演わくわく」と「本格的にオーケストラを楽しむB公演クラシカル」を同日に開催した。障害のあるアーティストの活動の場を拡充し、共演者との相互理解及び交流を深める場ともなる。

障害のある人やその関係者が、オーケストラコンサートを心ゆくまで楽しめる環境をつくる

実施内容

前年度のアンケート結果を検討。今回は、「気軽に」と「本格的に」の2公演を同日開催

前年度のアンケート結果を受けて「気軽にオーケストラを楽しむ」公演と「本格的にオーケストラを楽しむ」公演の2つを用意し、音楽の楽しみ方を選べるように配慮しました。

事前の会議では、新型コロナウイルス感染症の対策についても協議しました。また、当プロジェクトのノウハウを全国に広めるため、公演終了後には冊子を作成します。

●「ゆいまーるミュージックプロジェクト」会議

開催日：2020年6月28日、10月18日、

2021年1月31日

会場：天久ヒルトップ地域交流室会議室（3回目はzoomで開催）

対象：プロジェクトメンバー、冊子作成担当者

参加人数：16名（リモート参加を含む）

内容：前年の公演を踏まえた改善箇所や新たな取り組み、公演内容、周知方法や評価指標などを協議。新型コロナウイルスの影響による対応策についても協議。コンサート後は、振り返りと評価、冊子内容、次回へ向けての方針を協議

●美らサウンズコンサート 2020

開催日：2020年11月29日

場所：与那原町観光交流施設アリーナ

対象：すべての障害・難病のある人、家族・介護者など

来場者数：「気軽にオーケストラを楽しむA公演わくわく」214人、「本格的にオーケストラを楽しむB公演クラシカル」170人、

出演者数：62人（関係スタッフ約100人）

入場料：無料



「美らサウンズコンサート」チラシ



「ゆいまーるミュージックプロジェクト」会議の様子



ライブ配信



那覇ジュニアオーケストラ団員による「パプリカ」手話ソング

事業の効果

遠慮せず音楽を楽しむ芸術鑑賞の機会が増えるほか、相互理解や交流を深める

障害があり、大声や飛び跳ねるなどの動きで感動や喜びを表現する人や介護者の多くはコンサートに出かけるのをためらいがちです。しかし、繊細で迫力あるオーケストラの奏でる音楽を聴いて、感動したり豊かな気持ちになったりするのは、障害のない人だけの特権ではありません。そこで、どのような障害があっても、遠慮しないで心ゆくまで音楽を楽しめ

る環境をつくろうと、この事業を企画・実施しました。当事業には、「障害のある人や関係者の芸術鑑賞機会の増加」のほかにも、「障害のあるアーティストが活動できる場の拡充」「音楽家同士の相互理解と交流の深化」「ジュニアオーケストラの参加により、福祉に理解のある将来の音楽家を育成」「バリアフリー公演実施のノウハウの蓄積」の効果があると考えます。

選曲、プログラムから会場づくりまで、あらゆる点でバリアフリー化を実現

実施にあたり、多様な障害種による実情を当事者や家族から聴き、会場地域の福祉団体と連携しました。また、バリアフリー化の取り組みとして、音楽療法士のアドバイスによる選曲・曲順、色覚障害のある人にわかりやすい色使い、土足で入場できる会場（防塵・吸水マット設置）、手話通訳、UD トーク活用、ゾー

ニング（聴覚障害のある人のためのエリア、自由な姿勢で鑑賞できるスペース、周りの目を気にせず鑑賞できるスペースなど）、補助犬の入場可、演奏中の出入りや歓声・拍手の可、障害のある人の反応についての事前の演奏者への周知などを行いました。

これまで得られたノウハウを他地域でも活用できるようにしたい

本事業の成功の大きな要因は、長年にわたって培ってきたプロジェクトメンバーと琉球フィルとの強いネットワークにあるといえます。そのようなネットワークをもたない団体が活動する際に活用できるノウハウを提供する取り組みも、当事業に求められる役割と考えます。今後、地域の福祉関係者やオーケ

ストラなどさまざまな立場の人が、同様のコンサートを主催できるように、冊子「開かれた音楽会」を作成します。また、新たな取り組みとしてリモートによる映像やアプリを使った参加方法の実証実験など、ニーズに応えたオーケストラの楽しみ方を追求したいと思います。



公演の様子



ゲスト出演者

新型コロナウイルス感染症の影響

琉球フィル独自の感染拡大防止ガイドラインの作成、LINE を活用した沖縄県の感染症対策ツールの活用、事前予約の徹底と QR コードによる密を回避する受付システムの開発、障害特性に配慮しマスクを着用できない感覚過敏の人を対象とした距離を取った鑑賞スペースの設置、看護師（プロボノ）の配置など、多くの対策を取りました。

事業名

第14回・第15回愛音楽(アネラ)音楽祭

団体名

特定非営利活動法人 サポートセンターケントミ

所在地：沖縄県沖縄市 URL：<https://anerahousi2.wixsite.com/kentomi>

事業概要

同法人は障害を持つ人が音楽祭への出場や運営に携わり、音楽祭を成功させることによって成功体験を積み上げ、社会参加への前向きな気持ちを引き出すことを目指して活動している。「沖縄発！障がい者社会参加ゆいまーる音楽祭」は、障害のある人々による障害のある人々たちのための音楽祭である。会場の設営から運営、出演まで障害のある人とない人が一緒に作り上げることで、社会参加への意欲醸成や偏見・差別のない社会作りに寄与し、誰もが住みやすいまちづくりを推進する。

音楽祭を成功に導いて成功体験を重ね、 社会参加へとつなげる

実施内容

会場設営・装飾・運営・出演すべてに障害者が携わる

愛音楽(アネラ)音楽祭は、障害のある人が、音楽を通して社会に参加し、音楽を人前で発表することによって感動と喜びを共有することを目的として開かれる音楽祭です。会場の設営・装飾・運営・出演すべてに障害者が携わり、障害者による演奏・歌・ダンスなどを披露する音楽祭イベントを実施しました。また、音楽祭と同会場で、障害者一人ひとりの特性に合わせて衣服を製作する、障害者の衣服開発の第一人者である鶴丸礼子氏を招き、障害者モデルによるウエディングファッションショーも開催しました。

音楽祭には県内外から13組50人が参加し、さまざまなパフォーマンスを披露しました。新型コロナウイルス感染予防のため、愛音楽(アネラ)音楽祭初の

無観客、生配信で開催。出演者の一部はあらかじめ録画した動画での配信となりました。なお本イベントは、第18回ゴールドコンサートの予選大会in沖縄を兼ねているものです。第18回ゴールドコンサート出場権獲得および愛音楽(アネラ)賞はparaphraseが受賞しました。

●第14回・第15回合同企画

愛音楽(アネラ)音楽祭

開催日：2021年2月23日

場所：沖縄県総合運動公園サブアリーナ

参加人数：13組50名

参加費の有無：なし



事業の効果

ライブ配信によって多くの人に活動を届ける

音楽を通じて、社会に参加するきっかけ作りをすることができました。参加者は手が動きにくかったり、光を感じるができなかつたりなど、さまざまなハンディキャップを持っています。しかしそうした中でも裏方あるいは出演者として音楽祭に参加し、それぞれの立場から成長を実感してもらうことができました。また、新型コロナウイルス感染症の影響によって、はからずもライブ配信、動画配信とした

ことで、当初、想定していたよりも多くの人に視聴していただき、感動を届けることができました。通常開催の場合であれば、500人程度の観客を対象にパフォーマンスを行います。しかしライブ中継にしたことで1400人を超える方々に視聴していただき、より多くの方にパフォーマンスを見てもらって活動を知ってもらうことができました。

ZOOM中継などのさまざまな試みは、今後の活動にも好影響

ライブ配信や動画配信にすることで、音楽祭の様子をビデオで記録として残すことができ、開催後も多くの人に楽しんでいただけるようになりました。ライブ中継動画は、いつでも視聴できる状態で残るので、今後も見ていただく機会を増やすことができま

す。またライブ中継の中で、ビデオを流す、ZOOMで中継するなど先進的、革新的な取り組みを行いました。これらの新たな取り組みは、今後の音楽祭においても活用できるものだと感じています。

動画をコンテンツとして販売するための道筋も開ける

今回の取り組みによって、今後、動画をコンテンツとして販売する道も開くことができました。今回はプロ仕様の機材を使用して、撮影を行っています。プロ仕様の機材を使って撮影した映像を編集することによって、動画として販売する可能性も見えてきました。こうした道が開ければ、障害者が行ったパ

フォーマンス動画を障害者が編集し、対価を得られる仕組み作りにつなげることができます。今後の音楽祭においてもレベルの高い機材を用いて撮影し、コンテンツの質を高めていくことで、動画のコンテンツ販売で障害者が賃金を得られる道を開いていきたいと考えています。



新型コロナウイルス感染症の影響

毎年2回、開催していた音楽祭が新型コロナウイルス感染症の影響によって延期せざるを得ませんでした。今回、開催できた音楽祭でも会場に来た上で出演してくれる方が少なく、12組中8組の方がDVDでの参加になりました。しかしこのような中でもリモート配信・ZOOM参加の人たちとのリアルなやり取りで、これまでにはない新鮮な音楽祭が開催できたと感じています。感染症を防ぐための具体的な対策としては、会場入口で消毒・検温所を設置したほか、会場入口をその場所だけ解放し、関係者以外立ち入り禁止。看護師2名を配置し関係者の体調確認等を実施しました。このほか会場内、廊下など数か所に消毒場所を設け、マスク着用・消毒をお願いしました。会場内では、三密にならないようにし、窓は常時開けて換気を行いました。

令和 2 年度
障害者による文化芸術活動推進事業 事例集

発行日 令和 3 年 3 月

発 行 文化庁地域文化創生本部

〒 605 - 8505

京都府京都市東山区東大路通松原上る三丁目毘沙門町 43 - 3

編集協力 株式会社アドマス



Agency for Cultural Affairs, Government of Japan